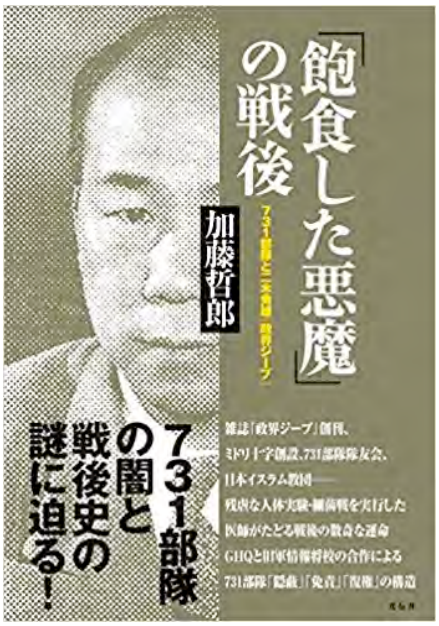
2017 年 NPO731 部隊細菌戦センター第 6 回総会 4 月 9 日（日）

加藤哲郎講演記録

「飽食した悪魔」の戦後――731 部隊の隠蔽・免責・復権と二木秀雄

（近藤）お待たせしました。NPO 法人 731 部隊細菌戦資料センターの総会は先ほど終わりまして、これから第 2 部の加藤先生の講演に入ります。加藤先生はコミンテルンの政治学的研究から始まって、「永続民主主義革命論」や「象徴天皇制」をめぐる論考など非常に広範囲で、多岐にわたる研究活動をしています。皆さまご存知の通りですが、私たちも思いがけず、びっくりしました。731 部隊について、特に二木秀雄の活動について、非常に綿密な調査をされて、間もなく 5 月末に、『「飽食した悪魔」の戦後』という本が刊行される予定です。400 ページに及ぶ膨大な 731 に関する著作なそうです。今から、ドキドキ、わくわくしています。

731 部隊については、今まで 300 冊に及ぶ関連図書が出ておりますが、なかなか高級将校や高等官の伝記とか研究、列伝が全く無いと言っていいぐらいです。石井四郎についてのものがあるくらいで、二木クラスの、ちょうど高等官、部隊の上層部と、下の兵士たち、研究班員たちとのつなぎ役にいるような位置の二木秀雄が取り上げられた。しかも、戦後において GHQ との秘密交渉で免責にたどり着く。それからミドリ十字を設立して朝鮮戦争に関わっていく。『政界ジープ』という雑誌を舞台に復権していく過程というのは、数奇な半生とも言えます。これを詳しくこの御本で書かれておりますが、今日は、そのダイジェスト、核心の部分をお話しいただきます。早速お願いします。



多磨霊園の 731 部隊「精魂塔」とゾルゲ事件を手がかりに

（加藤）ご紹介いただきました加藤と申します。案内には一橋大学名誉教授になっておりますけれども、実は 10 日前まで早稲田大学大学院の客員教授で、3 月末で 2 度目の退職になりました。ようやくいろいろなことが自由にできるようになりましたので、今日も実は総会の方を見せて頂き、NPO の会員になりたいとお願いしました。今後はこういう活動もやっていきますので、よろしくお願いいたします。

731 部隊の問題を、今、本にしています。『「飽食した悪魔」の戦後―731 部隊二木秀雄と「政界ジープ」』というタイトルで､花伝社から 5 月下旬に出ます。皆さんの所には、多分縦書きと横書きのレジメがそれぞれ 5 ページついていて、その縦書きの方に「はしがき」が入れてあります。横書きの方の後ろの方に、小見出しまで入った目次が入っています。本の方は 4000 円近い値段で、なかなか個人の方に買ってもらうのは大変かもしれませんけれども、今日はチラシだけ入れさせていただきました。

今日お話するのは、その中の、731 部隊の隠蔽、免責、復権という問題です。はじめは細菌戦部隊の存在そのものを隠そうとした。隠そうとしたらもう米軍が知っていた。それで今度は戦犯にならないようにと免責工作を進め、GHQ の G2(参謀 2 部、情報・諜報担当)に保護され、米軍細菌戦部隊に人体実験データを提供してバーターしようとした。東京裁判が結審し、石井四郎以下幹部たちが戦犯にならないで済んだころ、人体実験や細菌戦に加わった医師・医学者たちも復権していく。この復権には､GHQ の中の PHW（Public Health and Welfare ：公衆衛生福祉局）という部署が関係しています。日本の医学界が全体として民主化される過程に便乗して、731 部隊の医師たちが生き残っていった。こんな話です。

それらに深くかかわったのが、先ほど近藤さんからも名前が出ました、二木秀雄（ふたぎ・ひでお）という医師で、柔道有段者の武骨な男です。これがなぜか初めは金沢で『輿論』というローカル雑誌、その後上京して『政界ジープ』という大衆時局雑誌を 10 年間出す出版社社長になる。その途中で『医学のとびら』という厚生省医務局の医学生向け雑誌を出して、医学界・医薬産業にも入り込んでいく。こういう流れを追いかけていくと、それがどうも 731 部隊の再結集と関わりそうだ、と見えてきました。

もうひとつ、二木秀雄が重要なのは、『政界ジープ』で儲けた金なのか、731 部隊の隠匿資金なのか、あるいは GHQ にデータを提供してもらった金なのか特定できないのですが、巨額のお金を持っている。それを資金にして、終戦から 10 年経った 1955 年に、こっそりと隊友会「精魂会」という 731 部隊の同窓会を作った。この精魂会が秘密結社のように作られ、なぜか多磨霊園の中に「精魂塔」という慰霊碑を建てます。表にも裏にも何も書いていない慰霊碑ですけれども、これは 151 万円かかっています。そのうち 146 万円をこの二木秀雄がボンと私費を払って、731 部隊の慰霊塔を作った。それが実は、『政界ジープ』の記事を手がかりにゾルゲの遺骨が発見され建てられた、リヒアルト・ゾルゲの墓、尾崎家の墓、ゾルゲ事件被告たちの慰霊塔の近くに建っているのです。

多磨霊園 731 部隊精魂塔

多磨霊園のゾルゲの墓

ゾルゲ事件を「赤色スパイ事件」と名付けた二木秀雄『政界ジープ』

なぜこれが 731 部隊の慰霊塔だとわかったかと言いますと、私は今度の本を書く前に『ゾルゲ事件』という平凡社新書を 2014 年に出しています。そのゾルゲ事件の関係で、『政界ジープ』という時局雑誌が重要になったのです。現物はこういうペラペラの紙で、表紙が裸の女性で、当時カストリ雑誌とかエログロナンセンスと言われたもののひとつです。

『政界ジープ』1948 年 10 月特別号の真ん中に「尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件の真相」と書いてあります。この記事が実は、ゾルゲ事件にとっては非常に重要な、画期的な記事でした。尾崎、ゾルゲが「赤色スパイ」と呼ばれたのは、この記事が初めてでした。戦後すぐの時期は、ゾルゲ事件はスパイ事件というよりは、反戦反ファッショ闘争の一部とされていました。尾崎秀美（ほつみ）という元朝日新聞記者が獄中で書いた家族への手紙『愛情はふる星の如く』がベストセラーになり、「彼らは日本軍国主義に反対した闘士で愛国者だ」とされていた。

この雑誌が 48 年 10 月に出るんですけれども、その数ヵ月後の 49 年 2 月に出た GHQ の『ウィロビー報告』で「赤色スパイ事件」というタイトルが付けられて、それ以来ゾルゲはソ連のスパイ、尾崎もスパイだった、朝日新聞は共産主義スパイを出したという話に変わっ

3

て行く。ソ連側は、64 年までゾルゲなんか知らないという態度を取って反論もしないものですから、「尾崎ゾルゲ赤色スパイ事件」というイメージが 1 人歩きして定着していく。その最初の報道をしたのが、この『政界ジープ』です。この記事を見て、ゾルゲの「東京妻」だった愛人石井花子は、ゾルゲの遺骨を発見し、多磨霊園にお墓を建てました。

『政界ジープ』1948 年 10 月特集号

無署名の記事ですから、どうやってこの記事が出来たのかと思って調べたら、731 部隊結核班長の二木秀雄が発行人で、ジープ社社長でした。そのお墓が多磨霊園の中にあった。これが二木秀雄のお墓です。そこから 100m ぐらいの所に、731 部隊の精魂塔がありました。

二木秀雄墓碑

4

これらのお墓については、インターネットで調べれば『歴史が眠る多磨霊園』という大きなホームページがあり、多磨霊園に眠る著名人の墓碑の解説記事が出ています。この精魂塔について、ホームページを作っている小村大樹さんという方が、多磨霊園の事務所の帳簿を調べて「Unit 731 Memorial」つまり 731 部隊の慰霊塔だと特定しました。森村誠一『悪魔の飽食』にも出てきます。こののっぺらぼうの何もない慰霊碑に、毎年 8 月 15 日に一番近い日曜日に 731 部隊の関係者が集まって、かつて満州でやってきたこと、現在どうなっているかを語り合う戦友会・同窓会を開いていたのです。

でも、何で多磨霊園なのか。精魂塔が出来たのは 1955 年ですが、普通の戦友会、一般の日本の戦友会は、もう少し前、1949 年に靖国神社の存続が決まり、52 年にサンフランシスコ条約で日本が独立すると、53 年頃から続々と出来て最高時 4000 も隊友会（戦友会）が作られます。そうした戦友会・隊友会のほとんどは、靖国神社にお参りする。戦友が祀られた靖国神社の近くの料亭かなんかで、「同期の桜」とか「さらばラバウル」など軍歌を唄って昔を懐かしむ。これが普通の戦友会の形です。

ところが、731 部隊は、ずっと存在そのものが隠されている。表に出ることが出来ない部隊です。それで、二木秀雄が画策して同窓会をこっそりと作り、731 部隊だけの小さな靖国神社に当たるものを建てた。私は「ミニ靖国」と呼んでいるんですが、関係者を慰霊し集まることのできる精魂塔を多磨霊園の中に作った。ちょうどそのすぐ近くにゾルゲの墓、尾崎家の墓もあったので、『政界ジープ』の二木秀雄を研究してみようと思ったわけです。調べていくと、二木秀雄が大変ユニークな人物で、731 部隊研究にとっても重要だとわかったのです。

731 部隊平房本部の 1300 人は早々に帰国

731 部隊はどういうものだったのか。石井四郎が隊長というのはわかっている。その他に 731 部隊には何人いて、戦後どうなったのか。1981 年に森村誠一が『悪魔の飽食』を書いてベストセラーになったので、私は『「飽食した悪魔」の戦後』として、戦後の事を調べてみた。『悪魔の飽食』が出た頃から、731 部隊の関係者も重い口を開き始め、幾つか回想が出ている。近藤さんたちの聞き取りも進む。それでもまだ全容がわからないのです。

最初の頃の記録では、例えば 1945 年の 8 月 11 日に参謀本部の朝枝中佐がやってきて、「全ての 731 部隊の記録を地球上から永遠に抹殺せよ」と言った時に、その命令書の中に「細菌学等の博士号を持つ 53 人の医者は、直ちに日本に帰すように」と言っている。その人たちは、細菌戦についての非常に重要な知識を持っているから、ソ連軍がやってくる前に帰れと言っています。それらにもとづいて平房本部の隊員たちは、素早く帰国した。

それからジャーナリストの青木冨貴子さんが見つけた石井四郎の個人的な「終戦当時メモ」がありまして、その中の 45 年 11 月 20 日付に満州から帰って来た 1300 名、満州の平房本部にいた人たちのことがでてくる。牡丹江とかいろいろな所に支部があったのですが、彼が直接の指令で帰すことが出来たのは平房の 1300 名です。その 1300 名を一時的に 300

5

人、できればさらに小さく 100 人、彼の使える医者の優秀な者だけを残して、あとの連中には退職金、というよりも口止め料を払って、「絶対に 731 部隊の事は言うなよ」と言って部隊を解散しようと思ったらしいメモがある。その中に、兵士 700 人、女性 400 人、少年 200 人と出てくる。女性が 400 人もいた。731 部隊の女性の問題は重要で、郡司陽子という女子隊員の手記があるぐらいで、あとの記録に隊員の奥さんが一緒に行っていた話はありますが、あまり出てこない。どうも女性も 400 人ぐらいいた。少年兵の方は、少年兵同窓会「房友会」の記録があり、ある程度わかっています。とにかく石井四郎は、平房の 1300 人に口止め料を配って何とか秘密を保とうとした節がある。一時的ですがスリム化の構想もありました。

満州に取り残されソ連に抑留された 1200 人

満州の他の支部にいた残りの 1000-1200 人を、石井四郎は当初、ソ連に捕まったとあきらめていたようです。その 1200 人ぐらいの、平房本部にいなかった他の支部の隊員の多くは、ソ連軍に捕まって、シベリア抑留の一部になる。しかも 731 部隊で人体実験や細菌戦をやったことがわかれば戦犯にされる。1949 年の末にハバロフスク裁判があり、その裁判記録があります。これには 12 人の 731 部隊の関係者が被告になります。山田乙三関東軍司令官も入っていますが、実際に人体実験や細菌戦を指導ないし実施した人たちが捕まって有罪となった。731 部隊の川島清ら一番重い被告は禁錮（矯正労働）刑 25 年、実は当時のソ連では最高刑です。普通のシベリア抑留の人は、ほぼ 1950 年までには帰ってくるのに、731 部隊の戦犯とされた人々は、その後も収容所に残される。

ハバロフスク裁判の関係者は 12 人の被告だけじゃなくて、証人として 20 人ぐらいの名前が出てくる。それを合わせても、せいぜい 30 人ぐらいです。千数百人がシベリアで捕まっていると石井四郎も想定しているのに、実際に裁判にかけられたのは 12 人しかいない。近藤さんは、旧ソ連のハバロフスク裁判で使われた、シベリア抑留者の中の 731 関係者の記録を見ているんですが、実際 731 関係で尋問を受けた人が、ちょうど 100 人ぐらいなそうです。シベリア抑留は日本人 60 万人ですから、その中の 100 人は、小さい数です。731 部隊関係者で 100 人ぐらいは、どうも「細菌戦、人体実験という国際法ジュネーブ議定書に違反する戦闘に加わっていただろう」と、ソ連で実際に尋問を受けた。12 人が被告として裁判にかけられ服役して、1956 年の日ソ国交回復の恩赦で戻ってくるのですけれども、それでも 1200 人のうちのせいぜい 100 人くらいです。

あとの人たちはどうなったのだろうと思って、私はこの研究とは別にシベリア抑留の研究をアメリカの国立公文書館でやっているものですから、その関係資料を見ていたら、自分は 731 部隊の関係者だけれども、そのことをひたすら隠してようやく日本に帰ったという人が、何人かいるのです。実際に見つけたのは 3 人分ぐらいですけれども、731 部隊関係者で、自分は細菌戦に関わったと言えばソ連で大変な罪に問われるから、そのことを隠して、普通の兵士だったと言って帰ってきた人が、シベリア抑留帰還者の中に数百人いるだ

6

ろうと思われるのです。ある 731 部隊と関係ないシベリア抑留者の手記では、抑留所のエピソードとして「自分の部隊には四国出身で 731 部隊でネズミ捕りをやっている男がいた。この男は面白おかしく 731 部隊の様子を退屈な強制労働の合間に話してくれた」といった話が出てくるのです。ですから、石井四郎のいう帰国した平房本部の 1300 人、満州に残された 1200 人ぐらい、合わせて 2500 人から 2600 人、それが森村誠一『悪魔の飽食』がベストセラーになった頃までの、おおよその推計でした。

軍人恩給支給対象調べでわかった 3600 人の大部隊

ところが、『悪魔の飽食』や少年兵の手記などが出て、それを野党が国会で追及し始めたわけです。1982 年、「『悪魔の飽食』にはこんなことが書いてあるがこれが事実か」ということで、共産党の榊利夫という議員が追及したときに、厚生省の側が、実はと言って出してきたのが、3559 名という数字です。その後一人増えて 3560 名になっている。そうすると、石井の話の満州に残された部隊の他にもどうも数百名がいて、総計は 3600 名近く、3560 名と今はなっています。正確に言うと、2012 年に社民党の国会議員が厚生労働省に質問書を出した時の答えが、731 部隊の総計 3560 名です。そこには、将校（少尉以上）131 名、准士官（准尉）18 名、下士官（曹長・軍曹・伍長）163 名、兵士（上等兵・一等兵・二等兵）1027 名のほかに、「軍属」として技師 50 名、技手 197 名、雇員 1270 名、庸人 633 名と数が出てくる。

ところがこれは、戦争を知らない世代には分かりにくい。技師とか技手って何なのでしょうか。石井四郎ほか、大幹部たちは軍医つまり軍人だった。ところが、これからお話する二木秀雄とか、京大から行った石川太刀雄、岡本耕造とか笠原四郎とか、そういう大学から送られて 731 部隊で人体実験をやっていた医者の多くは、実は技師という名前です。技師というのはエンジニアと思われるかもしれませんが、軍隊の軍事用語では軍属・文官です。軍人ではないけれども、軍隊で軍人と一緒にいろいろな事をやっている人々がいる。この人たちの中に、高等官の技師 50 名、判任官の技手が 197 名、それに雇員、庸人がいた。このうち軍属の雇員・要員は軍人恩給の受給対象にならないが、軍属でも技師・技手には軍人と同じく軍人恩給の支給対象者と認める、というのがこの数を厚生労働省が出した意味です。雇員 1270 名、傭人 633 名は、京大の石井四郎の恩師清野謙次や二木秀雄の金沢医大時代の恩師谷友次のような「嘱託」という名の非常勤顧問と共に、軍人恩給受給の対象者にならない。しかし残りの 1657 人は軍人恩給受給資格がある、ということです。これは、日本政府が 731 部隊を日本軍の一部として公式に認めたということです。

1943 年の陸海軍人給与法をレジメに入れておきましたけれど、大将 550 円から始まりまして、上等兵、一等兵などは給料が 10 円とか 9 円です。二等兵は 1 銭 5 厘の葉書で徴兵されて月給 6 円の時代に、中佐、大佐、少将、中将など将校は 300 円とか 500 円もらっている。軍人社会は徹底的なピラミッド社会で、階級が上に行けば給料も待遇もいいし権限も大きい組織です。この中の将校が、731 部隊の場合には 131 人いた。下士官というのは曹長、

軍曹、伍長ですけれども、それが 163 人いた。兵というのは一般兵士、二等兵、一等兵、上等兵の給料 10 円以下、これが 1217 名いたのです。膨大な組織の中のほんの一握りは 300 円の月給をもらっていて、一番下で仕事をして戦闘犠牲者も多い兵士は、たった 10 円の月給で仕送りも出来ないような生活をしていたことが見えてくる。もっとも「外地」では特別の手当がでて、731 部隊は、その恩恵も受けていたはずです。

陸海軍人給与（昭和18年）

陸　軍	月額	年額	海　軍	月額	年額
大将	550	6600	大将	550	6600
中将	483	5800	中将	483	5800
少将	416	5000	少将	416	5000
大佐	370	4440	大佐	345	4150
中佐	310	3720	中佐	268	3220
少佐	220	2640	少佐	194	2330
大尉	155	1860	大尉	158	1900
中尉	94	1130	中尉	94	1130
少尉	70	850	少尉	70	850
准尉	110	1320	兵曹長	101	1220
曹長	75	900	上等兵曹	55	660
軍曹	30	360	一等兵曹	28	346
伍長	20	240	二等兵曹	23	278
兵長	13	156	兵長	16	192
上等兵	10	120	上等兵	13	156
一等兵	9	108	一等兵	11	139
二等兵	6	72	二等兵	6	72

単位：円、等級：一等級、端数：切捨

当時の諸物価	
はがき	2銭
銭湯	8銭
米（10kg）	3円36銭
巡査初任給	45円

出典：大浜徹也、小沢郁郎 編『帝国陸海軍事典』同成社、1984年

もうひとつ、この俸給表に書き加えましたが、軍属の中の技師というのは将校級です。正確に言うと技師の 6 等、5 等、4 等・・とあるのですが、技師の 6 等が二木秀雄の初めの身分で少尉級です。彼は最後は 2 等技師で中佐級です。月給・待遇は、ほとんど軍人である軍医と同じです。軍属の技師、つまり医者たちの中で、実際に人体実験や細菌戦をした実行部隊は、青年将校格です。石井四郎たちは命令を下す側ですが、実際にペストノミ爆弾を作ったり、安達の実験場で生体実験をしたのは、大体が 1910 年前後の生まれ、当時 30 歳代後半から 40 代の技師たちです。兵士の下士官に相当するのが技手です。難しい言葉で言えば、技師というのは高等官で天皇の任命になるのですが、技手というのは判任官で曹長、軍曹、伍長クラスです。このように、731 部隊には 2 つの系列があって、軍人の系列と軍属の系列があります。雇員が 1270 人、庸人が 633 人、要するに 2000 人ぐらいの雇い人がいるので、軍人の系列よりも軍属の系列の方が、数としては多いのです。

戦友会「精魂会」「房友会」名簿に残されたのは 1 割 300 人弱

この厚生労働省の記録は、731 部隊に誰が所属していたのかの記録です。軍人恩給をもらうときには自己申告で軍属証明書をもらわなければいけないのですが、それを都道府県援

8

護局で発行するための台帳です。軍人の兵士は恩給が出るが、雇員・傭人には出ない。もともと兵士たちは軍歴を隠すようにいわれていましたから、申請しなかった人が多数いた可能性がある。シベリア抑留帰りの人たちは、ハバロフスク裁判の被告・証人にされた人はともかく、他の人たちは 731 部隊への所属を隠して帰国し、その後もずっと隠し続けた人が多いはずです。厚生省名簿の中に入っている可能性はあるが、申請しなかったかもしれない。

重要なのは、朝鮮人、中国人も 731 部隊に入っていた可能性はあるが、厚生省記録には出てこない。中国側の研究・証言では、中国人「労工」という名前で出てきます。身分図で言いますと、軍属の下の方の雇員、庸人よりもさらに下に「労工」がいて、これが大体中国人です。何をやらされたのかというと、ノミやネズミの世話とか、いわば汚れ仕事を日本人にこき使われながらやっていた。この人たちは、日本軍に使われたのに、厚生労働省の名簿には初めから入らないことになります。

朝鮮人については、朝鮮人のマルタ犠牲者は今まで 5 人見つかっているそうですが、ハルピン地域の特性から言うと、当時は日本国籍で 731 部隊に動員された朝鮮人が働かされていたのではないかと思います。近藤さん、いかがですか。

（近藤昭二）動員されて参加しているのはいます。

（加藤）やはり朝鮮人労工もいたようですね。この中国人・朝鮮人は、厚生労働省の 3560 人には入っていない数字です。

1955 年に、二木秀雄らが隊友会「精魂会」を作って、多磨霊園の精魂塔を建てて、そこに毎年 1 回 8 月に集まります。これが大体、森村誠一『悪魔の飽食』が出る 1980 年頃まで続いている。しかし精魂会の会員は、段々皆お年を召して亡くなっていきます。

この他に、「房友会」という、当時 731 部隊に 14，5 歳で雇われた少年兵の組織があります。こちらは若いですから、1990 年代まで存続しています。1990 年代に房友会、つまり少年兵たちが作った「房友会名簿」があるんですが、その名簿の中には、旧精魂会の人たちも全部入れたと書いてある。旧 731 部隊に関係した幹部たちの精魂会の名簿のほか、例えば飛行兵の波空会とかもあったのですが、そういう幾つかの同窓会組織をまとめた房友会の 1992 年名簿に出ているのは、亡くなった人を含めて 300 人弱です。

という事は、3560 人のうちの一割についてはある程度の事がわかっているけれども、残りの 3000 人以上の人たちは、一体どうなってしまったのだろうかという問題が、まだ未解明の大きな問題です。なぜそうなったのかと追いかけたのが、私の今度の本です。

梅毒生体実験をした二木秀雄という中堅幹部医師

わかりやすくするために、まずは二木秀雄という男を紹介しておきます。彼は、近藤さんが作った 731 部隊の組織図の中で、2 か所に出てきます。ひとつは、総務部企画課長、もうひとつは基礎研究をやる第 1 部第 11 課の結核班長という形で出てきます。これがポイントです。

9

総務部企画課は何をするかというと、簡単に言えば、今の長春、当時の新京にあります関東軍の本部と連絡して、細菌戦を具体的に進める 731 部隊側の窓口です。さらに、731 部隊の細菌戦準備は、もともとは中国に対してよりも、ソ連との戦争を想定して進められた。そのために彼は、ソ連諜報、ソ連情報を集めるインテリジェンス担当者として有能であったらしく、敗戦時は企画課長でした。

同時に医者として、第一部の結核班長になっています。結核というのは、あまり細菌戦には役に立たないので、彼は例えば安達のガス壊疽菌の人体実験にも携わっている。今までわかっている最も卑劣なのは、梅毒の生体実験です。彼は金沢医科大学の出身で、彼の先生が谷友次という梅毒研究、スピロヘータ研究の世界的権威です。二木自身の博士論文も梅毒です。それで、彼は結核ではあまりいい成果が出ないので、梅毒で人体実験をやるわけです。

梅毒の人体実験ってどうやるかと考えればわかるわけですけれども、極めておぞましいものです。ロシア人、中国人、モンゴル人等々のいわゆるマルタ、つまり特高警察や憲兵隊によって抗日分子とされた人たちを、裁判を通さないで 731 部隊に直接送って、そこで実験材料にする。その際二木がやっていたのは、マルタの中の男性と女性を組み合わせて梅毒実験をする。これはちょっと信じられないような話ですが、証言があります。

なぜ、それが必要だったのか。当時日本軍にとって、梅毒対策は深刻な問題でした。何よりも従軍慰安婦の人たちを通じて兵士に梅毒にならないようにしなくてはいけない。それから性病になった場合、兵士をどうするかという問題が出てくる。これを満州ハルピン地区で一手に引き受けていたのが、二木秀雄です。結核・梅毒の生体実験をすることによって従軍慰安婦問題にもかかわったという事がわかってきた。

731 部隊の隠匿物資と金沢「仮本部」の設営

ところが二木秀雄は、戦後は自分の故郷金沢に帰って、1945 年の 8 月から 9 月に 731 部隊の仮本部を設営する。石井四郎がもともと金沢にあった旧制四高の出身で、それから京都帝大という関係もありまして、731 部隊には、金沢の関係者が非常に多いのです。二木秀雄の場合は生粋の金沢っ子。45 年の 8 月から 9 月、この時期に仮本部の隊長になったのが、731 部隊のナンバーツーと言われた増田知貞大佐です。彼も金沢出身ということで、金沢に 731 部隊の物資と資金、データが大量に運び込まれました。

参謀本部から「731 部隊の痕跡は地上から永遠に抹殺せよ」と言われたのに、自分たちがやった実験データを捨てるのはもったいない、実験器具・ペストノミ爆弾は苦労して作ったから惜しいということで、膨大な物資・データを、まだソ連がハルビンまで攻め込む前に、特別列車を仕立てて釜山まで鉄道で運んで、それから船で下関、門司、境港などの港へ入り、それらを金沢の近郊に隠すわけです。その中には医学実験ですから、白金とか錫のインゴットのような貴金属も入っていました。児玉誉士夫は、タングステンなど軍の隠匿物資で稼いだ事で知られています。それと同じような貴重物資を、金沢の近辺、具体的

には陸軍の施設や陸軍病院、金沢医科大学の倉庫とかに、一旦納めた。その受入責任者と思われるのが、この二木秀雄と金沢医科大（後の金沢大）教授の石川太刀雄です。

しかもそれが45年9月下旬に、東京に近い所でないとGHQとの交渉が不便だという事で、千葉に移転します。石井四郎の故郷が千葉県の成田空港のそばですが、千葉県の稲毛に本部「留守業務部」を移す。平房で総務部長だった太田澄と経理担当の佐藤重雄が責任者です。その際、二木秀雄は金沢に残ります。金沢医科大学には石川太刀雄という 731 部隊員で57人の生きた人間を解剖してそのデータを持ち帰った有名な医学博士がいました。この石川の解剖データが、米軍にとっては特に貴重なものとして、後に731部隊のデータが25万円で買い取られ免責になるさいの、有力な取引材料になります。

この石川と二木が金沢に残って、金沢でのGHQ工作をやるわけです。その材料が、46年から『政界ジープ』になる雑誌の前身で、45年11月から『輿論』というローカル雑誌を作ります。何をやったかというと、「今世の中では、天皇制をどうするかが問題になっている。しかし、アメリカ民主主義のいいところは、政治は軍部や誰か個人の一言で決めるのではなくて、輿論に従って決める事だ。従って日本で天皇制をどうするかは、国民投票で決めよう」と提唱するのです。これはなかなかの名案で、当時、あらゆる世論調査で、9割以上は天皇制維持でした。共産党だけが天皇制廃止を言っている。その時に、天皇制についての国民投票をやれば、絶対に天皇制を残せる、つまり国体が護持できるというのが二木流です。天皇制維持と原爆・原子力の平和利用の問題が、彼の雑誌の二本柱になります。

ジープ社社長として反共時局雑誌『政界ジープ』を10年間刊行

その後、二木秀雄は上京してジープ社社長となり、『政界ジープ』という雑誌を1946年から1956年まで10年間、約100号出します。これは、当時は時局雑誌と呼ばれましたが、今で言えば週刊誌を考えて頂ければいいと思います。『週刊現代』とか『週刊ポスト』のようなものです。その中の右派のバクロ雑誌、スキャンダル雑誌が『政界ジープ』です。左派にも似たようなのがあります。それは共産党員の佐和慶太郎が人民社から出した雑誌『真相』です。『真相』の方は、後に『噂の真相』というのが戦後もずっと出ますが、『噂の真相』のモデルになったのが『真相』です。これも、46年から57年まで、約100号出ています。

左派の『真相』に対して、右派の反共保守の側からその情報を打ち消す雑誌として『政界ジープ』が出ていた。もっと現代的にわかりやすく言えば、「森友問題」を『日刊ゲンダイ』が大きく報じていますね。それに対して『夕刊フジ』はあまり追及しない。『日刊ゲンダイ』の方が『真相』で、『夕刊フジ』に当たるのが『政界ジープ』と考えて頂くと、イメージとしてはわかりやすい。時局雑誌といってもバクロ記事が売り物です。だからあることないことセンセーショナルに、漫画と写真をいっぱい使って、時々女性の裸のイラストも載せるという風な雑誌を、10年間出していました。

これは、当時のエロ・グロ・ナンセンスのカストリ雑誌とはやや異なります。戦後すぐ

に出た『世界』とか『展望』『潮流』のような論壇雑誌でもない。右の『政界ジープ』と左の『真相』が当時の 2 大時局雑誌だったので、私の今度の本の半分は『政界ジープ』対『真相』の占領期メディア研究になっています。そこでも 731 部隊が両方の雑誌にいろいろな形で関わってきますが、今日はこの点は省略しておきます。

『医学のとびら』で厚生省に取り入り日本ブラッドバンク社設立

二木秀雄は、『政界ジープ』を出すジープ社の社長として、いわゆる「逆コース」が鮮明になる 1949 年に、厚生省医務局編『医学のとびら』という新しい医師国家試験制度に向けた医学雑誌を出します。そればかりではなくて、49 年には、厚生省、労働省、文部省、それから東京都、日教組の後援で『若き人々におくる性生活展』というのを開く。これは何かというと、ベビーブームで日本の子供たちが増えすぎた、これを何とか受胎調節で産児制限しようと言うのですけれど、彼自身、医学博士としては梅毒が専門です。731 部隊で梅毒の人体実験をやった男が、戦後は若い人たちに正しい性教育をするというのです。それに日教組までが後援する。

その勢いに乗って、1950 年に始めるのが日本ブラッドバンク、後のミドリ十字の前身です。つまり朝鮮戦争が始まった時に、米軍の兵士が負傷して帰ってきます。その手術・輸血等々に使う乾燥血液剤が足りないということで、それを作る会社を始めます。二木秀雄と内藤良一、宮本光一（731 部隊お抱えの日本特殊工業社長）の 3 人で、話し合って始める。二木自身も取締役になります。おまけに 731 の関係者十人ほどを株主にします。北野政次（731 部隊の 2 代目の隊長）を東京事務所長にして、後に取締役に迎える。内藤良一が会長になって、ミドリ十字を大会社にし、厚生省の天下り先になる。薬害エイズが発覚した時、ちょうど内藤は亡くなった後でしたが、731 部隊の戦後の拠点だったことが問題になります。

要するに、731 部隊の将校クラスを一方で同窓会「精魂会」に集める、他方で日本ブラッドバンク・ミドリ十字を作って、部隊の主だった人たちが再結集するきっかけを作るのが、この二木秀雄という男です。1955 年に幹部の同窓会の精魂会を作って、多磨霊園の精魂塔というミニ靖国神社風慰霊碑を作ります。

戦後最大の恐喝事件「政界ジープ事件」被告から日本イスラム教団総裁に

二木秀雄は、『政界ジープ』は公称 10 万部ですけれども、勢いに乗って『財界ジープ』とか『経済ジープ』という雑誌も出し始めて、出版ビジネスで大儲けしました。何をやるかというと、中小企業とか地方銀行とかに行って「お前のところのこういうスキャンダルを握っている、書いてほしくなければ金を出せ」という取材名目での恐喝事件を起こします。1956 年当時、戦後最大の恐喝事件といわれた「政界ジープ事件」です。当初の被害額は 7000 万円で、1956 年 3 月に摘発されます。最終的には 1969 年まで、彼は刑事事件の被告です。高度経済成長期はずっと「政界ジープ事件」の被告で、地裁、高裁、最高裁と上訴しましたが、最高裁で「懲役 3 年」の確定判決が出て、前橋刑務所に収監されました。

隊友会「精魂会」を作った翌年に、彼のビジネスの実像と逮捕が大々的に報道されたものですから、精魂会そのものは、二木を抜きにして運営されるようになります。二木はその間、闇の世界に入り込みます。スキャンダル記事を使った恐喝の仕方は、どこかで聞いたことがあると思いますけれども、後の総会屋、あるいは政治ゴロと呼ばれる人たちを生み出します。事実、1956 年逮捕時の『政界ジープ』編集長は陸軍中野学校出身の久保俊弘という男で、その後政界ゴシップを扱う院内雑誌『国会ニュース』を出して、「金を出さないと記事にする」と脅して金儲けし、総会屋世界の黒幕、右翼の大物になっていきます。

二木秀雄自身も、小宮山重四郎という山梨県出身の自民党の衆議院議員がいましたが、彼とその兄の平和相互銀行頭取小宮山英蔵に寄生します。後に「平和相銀事件」という大スキャンダルを生み出しますが、「闇の紳士の貯金箱」とよばれた政界への献金で有名な銀行頭取と組んで、二木は裏世界で生きていくのです。

二木秀雄は 1974 年、懲役 3 年で出てきた後、医者に戻って新宿ロイヤルクリニックという病院を、新宿の歌舞伎町に開きます。彼は梅毒・性病が専門ですから歌舞伎町になったみたいです。同時にイスラム教に入信し、「大乗イスラム」を唱える日本イスラム教団をつくり、自ら総裁になります。新宿区役所の向いに大きな薬屋のビルがあり、その中にロイヤルクリニックを作って、そのロイヤルクリニックにやって来た患者たちをイスラム教徒ということにして、当時のサウジアラビアとかイラクに布教資金援助を申請します。1975 年は石油ショックで、日本に石油が入らなくて困っている時です。

日本イスラム教団総裁と称して、サダム・フセインほかアラブの要人と話をつけ、日本への石油とオイルマネー導入をはかります。小宮山英蔵と組んで、オイルマネーによる新宿副都心開発を狙った。ちょうどその頃森村誠一『悪魔の飽食』が出て、二木の名前も出てきます。日本イスラム教団は一時的に繁栄しましたが、1992 年に彼が亡くなり、自然消滅します。日本では先駆的なイスラム教の日本化の動きだったので、これを宗教史の素材として博士論文を書いている人が 2 人ほどいるのですが、私の分析では、実態は時局便乗の新興宗教ビジネスで、二木秀雄を真面目な信仰者・宗教者として扱うのは間違いだと思っています。

第一段階「隠蔽」1945 年―「徹底破壊焼却」から「一時帰休・自宅待機」へ

こうした二木秀雄の動きと重なりあって、731 部隊全体の隠蔽・免責・復権が進みます。

隠蔽の段階は、1945 年 8 月 10 日に大本営から「731 部隊の痕跡はすべて地上から永久に抹殺せよ」という命令が来て、それに対して 400 人ともいわれますが、当時捕まっていた日本軍の捕虜マルタ（中国人、ロシア人等）をガス室や銃で皆殺しにして、灰を松花江に流して始末する。大量虐殺です。実験器具やデータは、大本営からは抹殺せよと言われたけれども、こっそりと石井は持ち帰るわけです。

その際、「3 つの掟」が作られました。これは、平房にいた 1300 人の 731 部隊の関係者にとっては、戦後生きていくプロセスでずっと耳に残っている言葉で、各支部にも伝えら

れたようでから、これを守り切った人が、おそらく数千人はいただろうと思われます。

掟の第 1 は、「郷里に帰ったのちも、731 部隊に在籍していた事実を秘匿し、軍歴をかくすこと」、つまり 731 部隊にいた事を言ってはいけないということです。だからシベリアに抑留された人でも 731 部隊所属を偽り、そのために早く帰れた人が、抑留者のなかにいるわけです。でもこれを生涯守り続けた人が圧倒的です。

2 つ目は、「あらゆる公職につかぬこと」です。公務員とか公職に就けば、公の履歴書を出さなくてはいけない。それにどう書くかという問題が出て来る、だから民間に就職しろと言う。ただしこれは、帰国直後から、破られていきます。1973 年の精魂会の名簿を見ると、国公立大学の教授を含め、2 割が公務員です。石井四郎ら軍医将校は公職に就かないが、他の人々は、生活のために公職でも就かざるをえなかった。

とばっちりを受けた例を言いますと、1948 年に帝銀事件がありますけれど、帝銀事件の犯人は 731 部隊など毒物を扱える軍隊の出身ではないかと捜査対象になる。警視庁は全国を回って、旧 731 部隊関係者の聞き取りをします。そのうちの 1 人が、その時たまたま国鉄に勤めていた。そしたら職場に警視庁が来て、「お前、帝銀事件の時に何をやっていた？」とアリバイを聞かれる。その人は、「いやアリバイがあります。ちゃんと働いていました」と答えるのですが、同時に警視庁は上司に「この男は、昔、満州 731 部隊にいた」と言ってしまうわけです。そのために職を失った例が出てきます。第 2 の掟、公務員になるなというのは、技師など中堅幹部達から率先して守られなくなっていくけれども、しかし一般隊員に対しては、よく効いた掟のようです。

3 つ目、「隊員相互の連絡は厳禁する」というのがあります。731 の軍歴を明らかにするな、公職に就くな、隊員相互の連絡をするな、これを厳密に守れば、731 部隊員は、一生 1 人でこの 3 つの掟を守り続けて生きて行かなければならない。ところがそれもその後、変わって行きます。

1945 年 8 月に「徹底爆破焼却、徹底防諜」と言われて、8 月末には平房本部の 1000 人以上が帰ってくる。その時石井四郎は、増田知貞（当時の仮本部の代表）を通じて、釜山や下関で「自分の故郷へ帰れ。その代り、連絡先を残しておけ」と言って、名簿を作る。それで、北海道地方、東北地方、九州地方という様に、帰省先の都道府県ごとの詳しい名簿を作って、名簿は本部が独占する。「お前たちは相互に連絡を取るな」といいながら、731 部隊の幹部たちは、一般隊員の連絡先を確保するのです。

8 月の段階では直ちに解散すると言いましたが、やがて隠して秘密組織にしようとする。9 月 20 日に、石井四郎が金沢の仮本部から『通告』という指示を出します。「お前たちをいったん退職させることにしたけれども、それを取り消す。今後も給料は払う。今後とも本部の方から、何らかの形で連絡が行くので、それは受けるように」という命令を出します。給料は、それを口止めのための「退職金」と受け取った人もいるのですが、月 100 円とか 300 円とかをもらった人が、実際に出てきます。平房にいた 1300 人については、そういう形で面倒を見て、部隊を解散もしない。秘密に 731 部隊を残しておく。

多くの一般隊員、特に少年隊員は、「一時帰休命令、自宅待機」と受け止めました。

帝国軍隊はなくなったのに、731 部隊と「3 つの掟」は残された

実際石井四郎は、実は朝鮮戦争の頃、警察予備隊ができて日本の再軍備が語られるようになると、細菌戦が必要になるということで、731 部隊の再建を考えるわけです。ところが、他の幹部たちは、もう石井四郎に付き合うのは嫌だと言って、誰も付いて来ない。これが日本ブラッドバン創設の裏側です。朝鮮戦争では石井四郎は米軍に協力したみたいですが、他の幹部・中堅は日本ブラッドバンクや隊友会「精魂会」を作って、石井四郎から離れていきます。私の本では「敬して遠ざける」と書きました。大体 1949 年から 1950 年です。

それによって、事実上、731 部隊は自然消滅します。ただし軍隊の正式の解散命令が出た事が無いのが、731 部隊です。他の軍隊は大体 1945 年 8 月末に武装解除されます。武器を米軍、ソ連軍ないし中国の国民党軍に渡して、軍隊として武装解除される。1945 年 12 月には、陸軍省、海軍省が無くなります。つまり、帝国軍隊そのものが無くなる。つぎは引揚・復員だと言うことで、復員省という名前になり、今の厚生省に引き継がれます。

日本軍は 1945 年に完全に無くなったはずなのに、731 部隊は、その後も残されます。一部の地域の一時期ですが、戦後も給与まで払われていた不思議な部隊です。これと似たようなのを、ひとつだけ私は知っています。それは、陸軍中野学校です。これも解散命令がいつ出たかわからない。やがて日本は甦ると信じた中野学校卒業生たちが、東南アジアとかフィリピンで「残置諜者」になりました。中野学校出身の小野田寛夫少尉が、1974 年にフィリピンで「まだ戦争は終わってない」と信じて密林に潜んでいたのが見つかった。日本の厚生省は何をやったかと言うと、彼の元上官を連れてって「既に日本軍は降伏した。貴君に対する軍の命令を解除する」と言って、ようやく出てきた。これに近い特殊な部隊が、731 部隊でした。

このことが、さっき言った問題、つまりなぜ靖国神社に祀らないで、多磨霊園の小さな名前の無い精魂塔に集まるのかということと、関係するのです。731 部隊の人たちは、自分たちは戦争で重要な役割を果たしたはずだ、天皇陛下の為にと信じて人体実験までやったけれども、戦争が終わったら、逆に隠さないといけない存在になった、旧軍人の中の日陰者、天皇の軍隊の鬼子とされたのが、731 部隊でした。彼らは、いつか再び自分たちが必要になると信じて、戦い続けるつもりだったのです。だから一般兵士や少年兵たちは、敗戦後の帰郷を「一時帰休命令・自宅待機」と受け止めました。「3 つの掟」は生き残ります。

米軍第一次サンダース調査への隠蔽工作

このことのために、1945 年中は、ずっと存在そのものを隠すことになります。石井四郎以下 731 部隊は満州に残っていると、幹部たちは口裏を合わせて偽装します。

1945 年 8 月末に、アメリカは、731 部隊の細菌兵器を調査するために第 1 次サンダース調査団を送ってきます。その後、第 2 次のトンプソン調査団、第 3 次のフェル調査団、第 4

次のヒル調査団と、1945 年から 47 年まで 4 次にわたってアメリカ軍は 731 部隊を調査するための調査団を送ってきます。このことの関係で重要なのは、サンダースを日本で出迎えたのが、GHQ という大きな占領軍の組織の中の GⅡ、ウィロビー少将の率いる情報・諜報部隊だったことです。

なぜそうなったかと言うと、占領軍は当時、マッカーサー元帥が 8 月 30 日に到着するのに合わせて、その迎え入れのために最初に入るのが情報部隊なのです。その時、米軍占領下で、日本の細菌戦調査の手はずと世話、宿舎・食事から通訳・要員とか、どこへ行ったらいいという情報を持っているのが、参謀 2 部 GⅡでした。

それから相方の日本側窓口は、陸軍参謀 2 部、これも情報部で有末精三中将が管轄していました。要するに細菌戦の調査は、軍の情報部、インテリジェンスからスパイ謀略まで担当する部門に任された。しかも、第 2 次、第 3 次、第 4 次米軍調査団も、全部 GⅡの管轄下で行なわれるのです。

重要な事は、軍医が配属されたという意味では、GHQ の中には PHW（公衆衛生局）があって細菌学者もいます。ESS（経済科学局）のなかにも生物学や生理学の学者がいます。しかし、731 部隊の細菌戦の問題に限っては、情報部 GⅡが最初から最後まで扱うことになる。

「石井四郎がこっそり日本へ帰って来たけれども、アメリカ軍は分からないでいた」という話がありますが、それは半分正しく、半分間違いです。GHQ の GⅡだけは、早くに石井の所在をつかんで身柄を保護し管理している。

当時、戦争犯罪調査で石井四郎を捜していたのは、CIC と言って、対敵諜報部隊でした。これは当時 CIS（民間情報局）のソープ准将の指揮下にあって、日本の非軍事化・民主化というポツダム宣言の忠実な実行にあたっていました。戦争犯罪を裁き、日本を民主化し、後には日本国憲法を作る路線で、GS(民政局)が中心になります。

それに対して GⅡは、ソ連との対抗で、過度の民主化に反対する。例えば共産党員など政治犯の釈放に反対した。GⅡのウィロビーのもとで 731 部隊の問題が処理されたことが、その後の免責交渉、復権の大きな土俵になるのです。そういう形で、731 部隊が GⅡの管轄下に入ったのが、きわめて重要です。

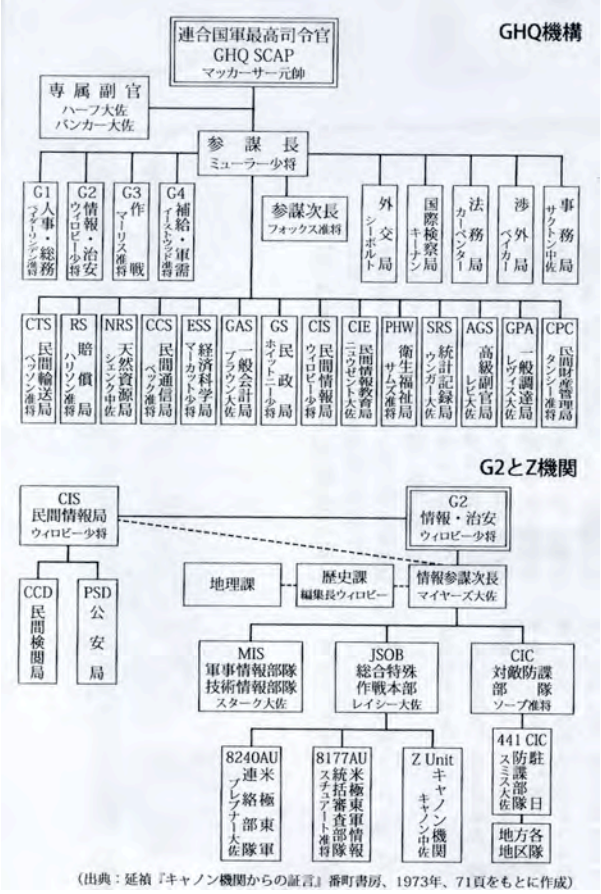
サンダースの調査に対して、細菌戦の研究はやっていたが攻撃用ではなく防御的研究だったというのが、直接尋問された増田知貞・新妻清一、通訳も兼ねた内藤良一、影で暗躍した有末精三、亀井貫一郎らの、米軍に対する口裏合わせの答えでした。しかし、サンダースの尋問を受けて、完全秘匿ではうまくいきそうもないとわかってくる。戦犯調査ではなく細菌学の調査だとサンダースがいうので、石井四郎はまだ隠れていますが、内藤良一らは、人体実験とペストノミ爆弾だけは隠して、平房の研究についてはむしろ積極的に供述して米軍に取り入り、戦争犯罪人としての訴追を逃れる方向に転換します。米軍 GⅡ関係者を宴会・パーティで接待して、恭順を示します。

翌 1946 年 1 月になると、第 2 次トンプソン調査団がやってきて、石井の身柄を隠しきれなくなった GⅡが、CIC に石井四郎と中国から召喚された第二代隊長北野政次の尋問を許し

ます。ただし、北野帰国に際して作られた関係者の意思統一「北野中将へ連絡事項」というのがあり、話していいことと隠すべきことの振り分けが行われます。これが、隠蔽から免責への転換点になります。

第二段階「免責」―GⅡ管轄によるトンプソン調査、国際検察局、法務局捜査への妨害

1946 年 1-3 月のトンプソン調査団にも、口裏合わせは通じました。トンプソンは、石井も北野も尋問できて 731 部隊の概略は把握できたのですが、人体実験と細菌戦の実行には踏み込むことができませんでした。尋問のすべてに、必ずGⅡ（参謀二部）が立ち会いました。ソープ准将指揮下の CIS（民間情報部）戦犯調査にも石井は応じましたが、これもGⅡを通じてです。つまり、米軍の中で、石井を囲い込んだウィロビーの反共謀略部隊と、非軍事化・民主化を進めるホイットニー・ケーディスの GS やソープ准将の治安・警察部隊がせめぎあっている状況です。石井はGⅡの管轄下にあるものですから、戦犯として訴追しようとする CIS への防壁になる。1946 年 5 月には、GⅡウィロビーの策略で、CIS ソープ准将が解任され、CIS と CIC （対敵防諜部隊）もGⅡウィロビーの支配下に入ります。ウィロビーの勝利で、GⅡは、GHQ 内で巨大な権力を掌握しました。



（出典：延禎『キャノン機関からの証言』番町書房、1973年、71頁をもとに作成）

ただし GHQ は、米軍兵士だけでも 40 万人以上の、巨大な占領機関です。当時戦犯追及をやっていたのは、CIS・CIC だけではありません。レジメに GHQ の組織図を入れておきまし

たけれども、いろいろな部局があるわけです。

その中に、国際検察局（IPS）というのがあります。これは、極東国際軍事裁判（東京裁判）のために特別に作られた部局で、誰が国家犯罪としての日本の戦争に重要な責任を持ったのか調べる部署です。

このIPSのモロウ大佐も、満州侵略や南京虐殺など日中戦争との関連で731部隊に注目し、石井四郎以下を尋問しようとした。そうするとGⅡは、石井四郎たちはGⅡの「絶対的管轄下にある」と言って、直接尋問を許さない。結局中国で現地調査まで行ったのに、国際検察局、つまり極東国際軍事裁判の被告を決める作業の中では、石井四郎は起訴されないことになる。

そればかりではありません。やはりGHQの中に、法務局（LS）というのがあります。国際検察局（IPS）は、極東国際軍事裁判でA級戦犯「平和に対する罪」を主に扱うのに対して、法務局は、BC級戦犯、B項「通例の戦争犯罪」とC項「人道に対する罪」の直接の実行犯、捕虜を虐待したり銃殺したりした軍人たちを捜査していました。

いわゆるBC級戦犯は、A級にくらべ重要ではないという意味ではなく、従来の国際法でも規定されていた罪を裁くもので、それはGHQの中で法務局（LS）がやっていたわけです。この頃、法務局にはいろいろな投書が来まして、「満州に石井部隊というのがあり、そこで人体実験をしていた」などという告発記録が積み重なっていたので、法務局のスミス中佐たちが、731部隊の人体実験を調べようとした。しかしこれも、GⅡのウィロビーが「731部隊の事は自分たちが調べているから任せてくれ」と妨害し、証拠集めが出来なくなる。それで、スミス中佐たちは、戦時中米軍機が墜落し、その搭乗員を捕らえて九州大学で解剖した事件（九大米兵解剖事件）を起訴することで、人体実験の代表にする。

つまり、石井四郎を隠していた段階から、日本にいることが表に出た段階で、国際検察局や法務局が「石井四郎たちが怪しい」と捜査を始めたけれども、それをGⅡが妨害して石井と731部隊を守った、というのが免責の次の局面です。この頃、二木秀雄は『政界ジープ』という、タイトルそのものに進駐軍のジープを使う時局雑誌を出して、GHQに迎合する。最高時自称10万部で、医薬企業の広告が多く、側面から最高幹部の免責工作を助けていました。

フェル、ヒル調査団への25万円での細菌戦データ提供による免責

免責の最後の段階は、今までの占領軍対日本人関係者とは構図が違って、東西冷戦の始まりにより国際的です。ソ連で抑留された60万人の中で、川島清中将や柄沢十三夫中佐が捕まって、731部隊で細菌戦をやっていた、人体実験があったと具体的供述を始める。その情報を、連合軍の一員であるソ連が、「これは重大な戦争犯罪だ」と、GHQを実質的に支配するアメリカに伝えて、石井四郎と菊池斎（ひとし）少将、太田澄大佐の有力幹部3人の身柄引き渡しと尋問を要求します。1947年初めのことです。

極東国際軍事裁判の国際検察局（IPS）には、アメリカほか12か国の検事たちで構成さ

れ、ソ連側検事も入っている。ソ連側検事団が、そこに 731 部隊の問題を持ち出してきたのです。ソ連側が石井尋問を要求して国際問題になりそうだということで、マッカーサーの占領軍の総元締めであるワシントンの 3 省調整委員会（国務省、陸軍省、海軍省）で、方針を検討することになった。ウィロビーたちがいろいろ電報を送って、ソ連側に石井四郎を尋問させていいかどうかと問いあわせるわけです。

結論を言えば、ソ連はアメリカ側立会のうえで 3 人の尋問ができましたが、米軍 GⅡによりあらかじめ答えていい範囲が予行演習されており、尋問にも GⅡが立ち会って、ソ連側は成果がありませんでした。アメリカ側は、「彼らを戦争犯罪人にするよりも、彼らが持っているデータが、ナチス・ドイツが持っていたデータよりも有益なものであるならば、彼らのデータをソ連に渡さず独占することを優先して、彼らを戦犯にする必要はない」という免責の決定が出る。石井四郎はそれを「文書で約束しろ」と要求したのですが、さすがにそれにはワシントンの国務省が反対して、文書にはなりませんでした。要するに、人体実験・細菌戦データを 731 部隊幹部が米国に提供すれば戦犯にしないという約束が、ソ連側の問合せをきっかけに、47 年に決まるわけです。

そのため米軍は、第 3 次フェル調査団、第 4 次ヒル＝ヴィクター調査団という、サンダースやトンプソンよりはるかに権限の大きい細菌戦専門の調査団がやって来て、731 医師たちを次々に尋問する。この段階で、石井四郎以下主だった幹部たちは、率先してアメリカ側に情報を提供し、実際ナチス・ドイツよりも細菌戦では進んでいたと認められたため、戦犯にならないで済むのです。特に金沢医科大学の石川太刀雄の集めた人体実験データの標本は非常に価値があり、アメリカは、フェル博士が 19 人、ヒル博士は数十人の医師・医学者たちから詳細な証言とデータを得る。この総費用が 25 万円、今のお金にすると 2500 万円ぐらいになるでしょうか。多くの 731 部隊の医者たちを料亭やホテルでもてなすことまでやって、アメリカは 731 部隊の細菌戦データを独占します。

米国側のヒル＝ヴィクター調査団の最終報告書には、「この調査で収集された証拠は、この分野のこれまでにわかっていた諸側面を大いに補充し豊富にした。それは、日本の科学者が数百万ドルと長い歳月をかけて得たデータである。情報は、特定の細菌の感染量で示されているこれらの疾病に対する人間の罹病性に関するものである。かような情報は我々自身の研究所では得ることができなかったものである。なぜなら、人間に対する実験には疑念があるからである。これらのデータは今日まで総額 25 万円で確保されたのであり、研究にかかった実際の費用に比べれば微々たる額である」と書かれた。

東京裁判そのものは、48 年 11 月に結審するのですが、その前の 47 年 12 月段階で、ほぼ 731 部隊の免責・不訴追が、米軍によって保証されることになります。二木秀雄も、このヒル、フェル調査団に協力し尋問を受けましたが、すでに出版ビジネスに入った結核菌担当ということで、梅毒人体実験や総務部企画課長の尋問はなく、脇役にとどまりました。

帝銀事件捜査に協力した731部隊の実質的解散

こうして 1947 年末には、731 部隊の免責・戦犯不訴追がほぼ決まるのですが、1 つだけややこしい問題が起きました。48 年 1 月に起きた帝銀事件です。池袋に近い帝国銀行椎名町支店に、占領軍の衛生調査だと称して、厚生省の松井という名刺を持った犯人が、行員たち 16 人に 2 回に分けて薬を飲ませて、12 人が亡くなるという大量毒殺事件です。その時残った重要な物証は二つです。ひとつは松井という名刺、ところが厚生省の松井氏には犯行時に明確なアリバイがあり、百数十枚の名刺を配ったことはあるが、犯人でないことははっきりしていた。それで彼が渡した名刺の相手でその名刺を持っていない人物が怪しいということになった。そこで警視庁の捜査員は、松井の記憶にもとづき渡した相手をたどって「松井さんの名刺をあなたはお持ちですか」と聞くわけです。それで松井名刺が出てくれば OK。つまり帝銀事件で使われたものではないことになる。それで次々に松井の交友関係が潰されてゆく。

もうひとつの物的証拠は、コップに入れて二度に分けて飲ませた青酸化合物です。青酸カリだと即死なのに、すぐには効かない（遅効性）青酸化合物でした。青酸ニトリールと言われていますが、そうした特殊な青酸化合物を扱える日本人が捜査の対象になる。これで 731 部隊関係者、それから川崎の登戸研究所、千葉の習志野研究所等々、旧軍隊の中で毒物研究をやっていた特殊機関の関係者が、広く捜査の対象になります。当然のことながら、731 部隊の石井四郎たちも警視庁の尋問を受ける。731 部隊は、45 年 8 月に帰国するときに全員に青酸カリを配って、「いざというときには、これで自殺せよ」という事までやっていますから、一般隊員でも、青酸化合物を持っていた。その関係で、石井四郎は、「自分の部下に犯人がいそうだ」と 48 年 7 月頃に言い出す。

ところがその段階で、また GⅡのウィロビー少将の方から、待ったがかかります。ウィロビー直属の GⅡ歴史課で当時使われていた、旧参謀本部の情報将校だった有末精三と服部卓四郎の 2 人が、なぜか警視庁に乗り込んで、「この軍関係のルートの捜査は占領軍の所管なので中止せよ」という命令を伝える。国際問題になるからと脅すのです。

そのために、警視庁の捜査方針は、有力だった青酸ルートの捜査はやむなく断念・中止して、もう一度、松井名刺に絞ることになった。その松井名刺を追っかけて、松井と会ったことがあるが松井名刺は紛失したという画家の男が、8 月に逮捕された。それが平沢貞通で、後に自白だけをもとにして死刑囚になる。青酸は絵具を作るために使ったということにして、何らの物証もなく、強制された自供だけで、平沢貞通が犯人にされてしまう。731 部隊から真犯人が出なかったから、生贄として警視庁に逮捕され、そのまま死刑が確定し、獄中で病死してしまう。真犯人はわかりませんが、平沢の冤罪はほぼまちがいなく、現在でも再審請求が続いているのはご存じと思います。

不幸なことに、ちょうどこの 1948 年 6 月に新しい刑事訴訟法ができて「自白だけでは証拠にならない」ことになるのですが、1 月の帝銀事件当時は、まだ自白中心の旧刑事訴訟法が生きていた。そのために、冤罪事件が、その後に残されることになるのです。

731 部隊関係者の手記を見ると、帝銀事件の犯人は 731 の仲間じゃないか、自分も帝銀事

件で調べられると思った、と書いている人がいる。実際に捜査員が職場にきて、軍歴がばれて仕事を失った元隊員もいた。「満州では日常的に毒物を扱っていたから、自分の所にも来るんじゃないかと思った。ところが来なかったからほっとした。それで秘密を守り続けた」という人がいる一方、「自分たちの所には45年に1回月給が払われてから、何回か配られたことがあったが、その後全然配られなくなった。帝銀事件の真犯人も、もう見捨てられたと思って犯行に及んだのではないか」と考えた関係者もいた。

石井四郎や二木秀雄を含むほとんどの関係者が警察捜査に協力しましたが、この段階では連絡網も機能せず、口裏合わせもできなかった。個別に GHQ に投書や告げ口をしたり、石井四郎の悪口を言い出す隊員もでてきた。隠匿資金や物資も乏しくなって、幹部も一般隊員も、みな自分の生活のために必死です。

この帝銀事件を、私は、事実上の 731 部隊の解散と考えました。帝銀事件をきっかけにして、ようやく戦犯訴追を逃れた中堅幹部達も、秘密を守り続ける一般隊員も、それぞれ勝手に動き始めた。幹部医師の中からさえ、みんな石井四郎の命令でやったと石井四郎一人に責任を押し付ける声が出てくる。ちょうど東西冷戦がはっきりし、いわゆる「逆コース」が始まる頃です。

第三段階「復権」　公衆衛生福祉局（PHW）サムス准将の 731 医師登用

最後の復権の問題については、GHQ の GⅡウィロビー少将のルートと共に、PHW（公衆衛生福祉局）サムス准将の医療改革を通じたルートを、私の本では重視しています。

確かにGⅡは、石井四郎を戦犯捜査から庇護して免責し、朝鮮戦争でアメリカの細菌戦に使った可能性があります。隠蔽・免責過程で暗躍した亀井貫一郎という黒幕政治家は、自らGⅡの反共謀略活動に加わり、後にはCIAに協力したと自伝で述べています。二木秀雄の場合は､GHQのGⅡでなければ知りえない情報､ゾルゲ事件の米軍独自調査情報や反共情報、共産党内部の怪文書などを、『政界ジープ』で報道しています。

ただし GⅡは、諜報･治安部隊ですから、731 部隊出身者を隠蔽・免責するうえでは大きな役割を果たしましたが、戦後社会で隊員たちが生きていく上での復権・復活には、積極的役割は果たせませんでした。

復権、特に 731 部隊関係者が歴史の表舞台に絶対に出るなと命じられたのに、戦後医学界などで復活し活躍するようになるにあたっては、占領軍の中の PHW（公衆衛生福祉局）のサムス准将の下で行われた医療改革が重要だと思います。これについては、『サムス准将の改革』という回想録が出ています。これは、竹前栄治さんが訳して岩波書店から出た『DDT 革命』というタイトルの改訂版です。DDT 革命というのは、伝染病・感染症対策のために、今なら環境汚染で禁止される有機塩素系殺虫剤 DDT を、復員してきた兵士やノミ・シラミが多い子供たちにかけ、地域によっては空からばら撒きまいた衛生対策でした。

今出ている日本の医療史・社会福祉研究の中では、サムス准将は「医療民主化の父」「日本の福祉の父」と評価されている。生活保護法や学校給食を作ってくれたのはこの人だと

いう事になっている。概して医者とか福祉研究の人たちには評判がいい。

私に言わせると、サムス准将は、それまでのドイツ型医学をアメリカ型医学に切り替えるうえでは大きな役割を果たしましたけれども、何よりも軍人なわけです。アメリカの占領軍軍人で一番高い地位の軍医です。サムス准将の管轄下で行われたいろいろな改革が、結局は 731 医学の復権につながったというのが、私の考え方です。

原爆被害調査と伝染病・感染症対策

サムス准将の PHW がやったことと、731 部隊の復権における関わりを、6 つ挙げます。1 つは、原爆被害調査、広島・長崎の原爆投下の後、勝利した米軍が調査に入ります。これもサムスに言わせると、「米軍人だけで入ると、我々が襲われたり放射能を浴びる可能性があるので、出来るだけ危ない所には日本人を行かせた」というのです。被害者の調査でデータは取ったけれども、何の治療もしなかったのが、有名な原爆調査です。これを総指揮していたのがサムス准将で、それに石川太刀雄、緒方富雄、渡辺廉、木村廉、小島三郎、田宮猛雄、御園生圭輔、貞政昭二郎等々、731 部隊関係者が 10 人ほど関係しています。この人たちは、それまでは日本軍の細菌戦を進めていたのに、今度は雇い主を換えて、米軍の原爆調査、「治療なき人体実験データ収集」を忠実に実行するわけです。

2つ目のルートは、伝染病・感染症対策です。占領期のサムスは、「我々が着いた国は、恐ろしく不衛生で貧しい国であった」といいます。そこにアメリカ軍の若く健康な兵士40万人を連れてきたわけです。そしたら米軍にとって最大の任務は、まずは不潔な日本人の伝染病からアメリカ軍人を守ることでした。そのために撒布されたのがDDTです。

それから、日本脳炎、赤痢、疫痢等々（日本脳炎で1945年から48年の間に亡くなっているのは2万人、赤痢、疫痢で亡くなっているのが1万5千人前後）のワクチンを作り予防しなければならない。当時の日本で感染症対策の仕事をやっていたのは、軍の防疫給水部731部隊のほかに、東京大学伝染病研究所がありました。ところが東大伝研は、京大医学部と並んで、731部隊に医師を送り出す最大の供給基地のひとつでした。その東大伝研で予防措置とワクチン製造をやらせて、サムスの命令で伝研を分割し、厚生省の予防衛生研究所（予研）というもうひとつの研究所を作って、ワクチンの審査その他をまかせる。

この伝研・予研の双方に携わった医者の非常に多くが、731部隊の関係者です。日本医学界の大ボスであった宮川米次（第五代伝研所長）、田宮猛雄（第七代で予研改組時所長）のほか、細谷省吾、小島三郎、柳沢謙、安東洪次、緒方富雄、浅沼靖らが戦後は伝研に籍をおきます。小島三郎と柳澤謙は、伝研から予研に移って、第二代・第五代の所長となる。特に小島三郎ら栄1644部隊からの帰還者は、予研に戻ったケースが多い。朝比奈正二郎、小林六造（初代所長）、福見秀雄（第六代所長）、村田良介（1644部隊、第七代所長）、宍戸亮（第八代所長）、北岡正見、堀口哲夫、若松有次郎（第100部隊）、黒川正身、江島真平、八木沢行正ら、予研の中心には731部隊関係者が多いのです。その他民間研究所を含め30～40人の元隊員が伝染病・感染症対策に携わる。これが第2の復権ルートで、米軍人の

健康を守るための対策で、ツベルクリンやBCG接種、ペニシリンやストレプトマイシンが入って、日本人の健康も守られる。その陰で、731部隊関係者が米軍によって使われます。

医学教育・厚生省を通じて復権した731部隊関係者

第3が医学教育・医学部改革です。それまでのドイツ型高等教育をやめて、医学部だけ6年制の新制大学を作ります。1年間インターンをして、それから医者になっていく制度に統一される。この制度を作ったのが、サムス准将です。そういう医学制度・医師国家試験の改革には、旧帝大の医学部の先生方の協力が、どうしても必要になる。旧帝大の有力な教授達の多くは 731 部隊関係者で、本人は嘱託であっても、弟子たちを満州へ送り出していたわけです。この関係で、国立大学や私立・公立大学医学部や国立研究所の教授や国公立機関の公務員になっていったのが、数十人います。

軍医は民主化の進む大学に簡単には戻れなかったのですが、軍属の技師は、ほとんどが大学に戻りました。講演では名前を挙げませんでしたが、著書の方では、大学別に東大（田宮猛雄、小島三郎、福見秀雄、細谷省吾、安東洪次、緒方富雄、宮川正、所安夫）、京大（木村廉、正路倫之助、岡本耕造、湊正雄、内野仙治、浜田良雄、荘生規矩、笹川久吾、浜田稔）、東北大（岡本耕造、加藤陸奥雄）、名古屋大（小川透）、大阪大（藤野恒三郎、谷口典二、木下良順、大月明、岩田茂、渡辺栄）、東京工業大（河島千尋）、埼玉医大（宮川正）、慶応大（安東清、児玉鴻、早川清、三井但夫）、金沢大（戸田正三、石川太刀雄、谷友次、斉藤幸一郎），京都府立医大（吉村寿人）、大阪市大（田中英雄）、大阪医科大（山中太木）、兵庫医大（田部井和）、名古屋市大（内野仙治、小川透）、信州大（野田金次郎、田崎忠勝）、三重大（潮風末雄）、大阪教育大（篠田統）、岡山大（妹尾左和丸）、九州大（山田泰）、長崎大（青木義勇）、長崎医大（林一郎、齊藤幸一郎）、熊本大（園口忠男、山田秀一、久保久雄）、久留米大（稗田健太郎）、熊本医大（波多野輔久）、順天堂大（小酒井望、土屋毅）、日本歯科大（広木彦吉）、昭和薬科大（草味正夫）、帝京大（所安夫）、東京水産大（安川＝関根隆）、防衛医大（増田美保）等々、と記しました。

こうした人々は、サムスの PHW と厚生省の双方に協力し、占領期の医療制度改革・福祉改革の助言者・顧問、各種委員会・審議会の委員になって医学界の権威となり、「白い巨塔」を支配していく。その他に、長友浪男が北海道衛生部長から副知事まで上り詰めるのを頂点にして、文部省に入る植村肇、横浜市衛生局長になる山田秀一、岩手県繭検定所長となる松田達雄らが公務員になる。東京都知事となる鈴木俊一も、内務省官僚として一時 731 部隊山西省分遣隊主計部に在籍したから部隊関係者といえるのではないか、と挙げておきました。

石井四郎らは開業医に、サムスの特例で公職追放を逃れた病院勤務医・開業医

第 4 のルートは、病院勤務医・開業医です。戦後の医師法改正によっても、戦前の医学博士の学位や医師資格は有効でした。戦後の日本は、圧倒的に医師が不足していました。

そのために、医師を新制医学教育で育てるだけでは足りなかった。陸軍病院・海軍病院を国立病院にしても、圧倒的に医師が不足していた。そこで当時、軍隊で少尉以上だった将校はすべて公職追放されたのですが、軍医についてだけは、サムス准将が自伝の中で誇らしげに述べているのですが、マッカーサーと GS（民政局）ホイットニーに願い出て、中佐以下（中佐、少佐、大尉、中尉、少尉）は公職追放の特例扱いとし、国公立病院に勤務してもいいという事にした。それで、日本の医療を救ったといいます。

この病院勤務・開業医が4つ目の復権ルートで、大変多い。石井四郎・増田知貞・菊池斉・太田澄・内藤良一ら軍医将校だった幹部たちは、だいたい開業医になる。二木秀雄も1950年に医師に戻ります。国立東京第一病院の大塚憲二郎、大阪日赤病院の工藤忠雄、国立岡山療養所の小坂愿、東京都立母子保健院の平山辰夫、国立都城病院の篠原岩助、県立都城病院の宮原光則、銚子市立病院の鈴木壌らは国公立病院に職を得た。そのほか本にいれましたが、「精魂会」隊友会名簿など各種名簿をも参照すると、高橋正彦、江口豊継、野口圭一、伊藤文夫、景山杏祐、加藤真一、可知栄、貴宝院秋雄、倉内喜久雄、児玉鴻、隈元国夫、高橋伝、竹広登、巽庄司、田中淳雄、中田秋市、中野信雄、夏目亦三郎、野呂文彦、早川清、羽山義雄、肥野藤信三、樋渡喜一、北条円了、細谷博、松下元、三留光男、平山忠行、高橋僧、池田苗夫、渡辺康、渡辺栄、小林勝三、大石一朗、三木良英、中野新らが開業医ないし病院勤務医になった。ソ連ハバロフスク裁判の被告だった川島清は、56年帰国後に千葉県八街市少年院医師、西俊英は東京で開業医になった。瀋陽裁判被告の榊原秀夫は、山口県で病院勤務医になったようです。

ミドリ十字など医療ビジネス、米軍407細菌部隊とのつながり

第5のルートは、医薬産業・医療ビジネスです。ここで二木秀雄は、大変重要な役割を果たします。731部隊には、薬学博士もいますし獣医もいた。薬や検査機器など医療機器も膨大なものを持っていました。特に細菌爆弾を製造した日本特殊工業の宮本光一らは、731部隊に寄生して大儲けをした。内藤良一は、戦後は一時期東芝生物理化学研究所新潟支部長を勤め、郷里の京都に戻り小児科医をしてから、二木秀雄・宮本光一と共に日本ブラッドバンクを創設する。武田薬品研究部長となった金沢謙一、日本製薬の国行昌頼、興和薬品の山内忠重、日本医薬工場長の若松有次郎らは、製薬業界に入った。鈴木重雄（後に精魂会事務局）の東京衛材研究所、早川清の早川予防衛生研究所、八木沢行正の抗生物質協会、目黒正彦・康雄の目黒研究所、加藤勝也の名古屋公衆医学研究所なども、医薬業界の一部でしょう。そしてこの業界は、もともと厚生省官僚の格好の天下り先で、東大教授等を経た医学者たちが顧問などの名目で迎えられる民間就職先でした。731部隊関係でも、例えば安東洪次は伝研教授から武田薬品顧問となります。金子順一も、予研から武田薬品です。

こうした医薬業界に、出版業の二木秀雄は、『政界ジープ』創刊時から広告取りで手を広げていました。また731部隊の重要な実験資材・機器納入業者であった日本特殊工業は、

社長の宮本光一が石井四郎の隠蔽から免責までの陰のパトロンとなり、自宅・別宅を隠れ家や秘密会議用に提供して、幹部たちの戦後を援助してきました。

今日731部隊の戦後の象徴とされる日本ブラッドバンク創設からミドリ十字、薬害エイズ事件にいたる流れは、この医療ビジネスに関わった内藤良一、二木秀雄、宮本光一の発案によるものでした。そしてそれは、設立時株主に野口圭一、太田澄、佐藤重雄、石川太刀雄、星野隆一、谷友次ら、後に東京プラント所長・役員になる北野政次、京都プラント所長・役員になる大田黒猪一郎、陸上自衛隊衛生学校と兼任でミドリ十字に関わる園口忠男らを迎え入れ、医学者・医師として立ち直った旧731部隊関係者の復権拠点、ネットワーク再建の核となります。サムスの医療改革、医療民主化の陰で、731部隊の医師・医学者が大量に登用され、復権していくのが、日本の占領の悲しい現実でした。

そればかりではなくて、占領した米軍の中に406細菌戦部隊があり、その研究所が横浜にあった。ここに100人ほど日本人が使われていたといわれます。これが第6の復権ルートだった可能性があります。去年アメリカ国立公文書館で調べて米軍軍医たちの名簿はありましたが、残念ながら、日本人協力者・雇用者の記録は見つかりませんでした。おそらく北野政次は、ミドリ十字の前に、これに関係していただろうと思われますが、証拠が無かったので、今回の本では使えませんでした。この米軍406細菌戦部隊と731部隊のはっきりしたつながりは、実験動物です。埼玉県春日部の近くに731部隊でノミを培養するためのラット・マウスなどネズミを大量に納入していた村があるのですが、その村で飼育されたネズミたちは、731部隊資材担当だった小林孝吉らが戦後に日本実験動物綜合研究所を作って、取引先を日本軍から米軍に乗り換え、米軍406部隊に納入され使われました。

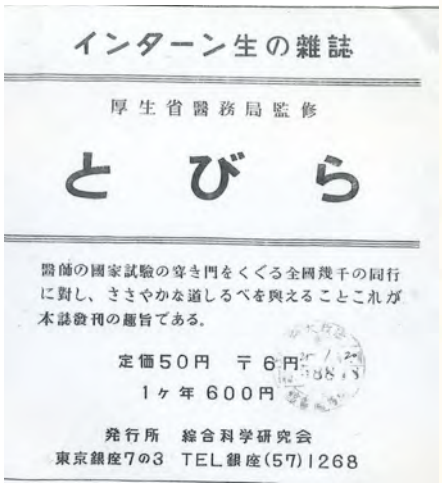
復権における二木秀雄と『政界ジープ』の役割

PHWと厚生省を介した731部隊の復権の要所要所で、二木秀雄が重要な役割を果たします。ひとつは、前に述べた雑誌の広告です。それから厚生省医務局へ取り入って『医学のとびら』という医学雑誌を出します。時局雑誌で稼いだお金で医学雑誌を作り、そこに 731 部隊関係者、石川太刀雄や緒方富雄を登場させ、医薬産業からまた広告を取ります。

『政界ジープ』に載った『医学のとびら』（初期は『とびら』）の広告があります。この厚生省医務局の雑誌を編集するために、二木秀雄は、ジープ社内に綜合科学研究会という学術的体裁の組織を作ります。この綜合科学研究会は、49 年の秋に、浅草松屋で「若い人におくる性生活展」を主催します。後援という所には、厚生省、文部省、労働省、東京都、日教組が入っています。日教組は生まれて 3 年目、「戦場へ再び教え子を送るな」と言い出す 2 年前です。

民主主義のもとで、性教育は必要だ、受胎調節や性病も教えた方がいいとして厚生省が任せた相手が、731 部隊で梅毒人体実験までした二木秀雄だったのです。しかも、実際に行われた展覧会の記録が『政界ジープ』に載っているのですが、その目玉は「高橋お伝」という明治の猟奇殺人事件の犯人とされた女性の局部標本です。東京帝国大学医学部が生ま

れたばかりの時に日本で本格的な医学的解剖をやった重要な資料なのですが、それは、女性で犯罪を起こすものは性器に外形的特徴があるという、石井四郎の恩師である京都大学・清野謙次博士の学説のもとになった標本です。それがずっと東大医学部の研究室に保存されていたのですが、その後、陸軍衛生学校に入っていたものを、戦後は二木秀雄が手に入れ展示するのです。この展示のために一室を設けた。それだけを見たくて来た人もいたようです。


インターン生の雑誌

厚生省醫務局監修

とびら

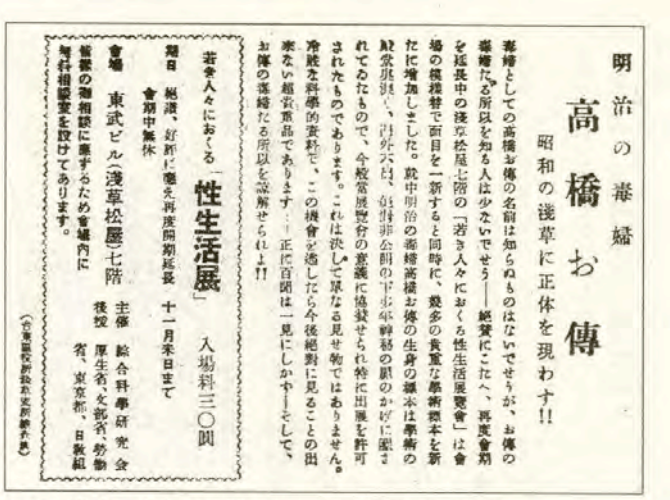
醫師の國家試驗の登き門をくぐる全國幾千の同行に對し、ささやかな道しるべを與えることこれが本誌發刊の趣旨である。

定価50円　〒6円

1ヶ年 600円

発行所　綜合科学研究会

東京銀座7の3　TEL銀座(57)1268


明治の毒婦

高橋お傳

昭和の淺草に正体を現わす!!

毒婦としての高橋お傳の名前は知らぬものはないでせうが、お傳の毒婦たる所以を知る人は少ないでせう——絶賛にこたへ、再度會期を延長中の淺草松屋七階の「若き人々におくる性生活展覽會」は會場の構造替で面目を一新すると同時に、幾多の貴重な學術標本と新たに增加しました。故中明治の毒婦高橋お傳の生身の標本は學術の見地より、法外六円、特別公開の下に厳重な監視の眼のかがやに置されてゐたもので、今般當展覽會の意義に感銘せられ特に出展を許可されたものであります。これは決して單なる見せ物ではありません。冷厳な科學的資料で、この機會を逃したら今後絶對に見ることの出來ない超貴重品であります——正に百聞は一見にしかず——そして、お傳の毒婦たる所以を諒解せられよ!!

若き人々におくる「性生活展」　入場料三〇圓

期日　絶讃、好評に應え再度開期延長　十一月末日まで

會期中無休

會場　東武ビル(淺草松屋)七階

主催　綜合科學研究会

後援　厚生省、文部省、勞働省、東京都、日教組

性愛の個別相談に專ずるため會場内に毎日相談室を設けてあります。

(古東京校新設れ光所新発見)

お伝の陰部の標本が公開された「性生活展」の広告

その直後、1949 年 12 月に、ソ連でハバロフスク裁判が公開で行われます。川島清や柄澤十三夫、西俊英らの供述が、タス通信等で生々しく報じられました。すぐに公判書類も 7 カ国語で出版される。その際、ソ連は、石井四郎や昭和天皇の戦犯裁判を主張したため、アメリカは公式に拒否します。ソ連の裁判はでっち上げで信用できないと発表する。ソ連では、1930 年代からスターリンの下で、ジノビエフ、ブハーリンらを「人民の敵」に仕立てるフレームアップ粛清裁判が何回もやられていた、だからこの細菌戦裁判もでっち上げであると声明して、裁判そのものを否定する。極東国際軍事裁判のキーナン主任検事らも、もう連合国の戦犯裁判は終わった、ソ連が単独でやった裁判は認められないと言う。

そのため、日本の大新聞にニュースだけは載りましたが、ほとんど後追いがない。ところが『レポート』『真相』のような時局雑誌は、大新聞に載っていないスクープと称して、731 部隊が人体実験をやった、と大々的なバクロ記事にするのです。

内地に生きている細菌部隊

前例のない不思議な感状授與がおこなわれた——

しかし、遂る一月廿日のセタクツ敗戦は、

捕虜たちは生身のまま凍らされ、メスてノコギリで手足を切断された。細菌を注入されてもだえ苦しむ彼らは、日本細菌部隊の實験材料であつたのだ、新聞は「耳新しい」といい、「荒唐」だと白を切る。しかしこれは事實であり、以下は「真相」獨自の調査による證據書類である。

その中で、『政界ジープ』のライバル雑誌、左派の『真相』は「内地に生きている細菌部隊」を特集し、二木秀雄の写真入りで、ジープ社の二木秀雄は石井四郎の側近で、満州では人体実験をしていたと書きます。それで、彼の経歴が明らかになる。『政界ジープ』は、すぐにそれに反論して、ソ連の裁判は共産主義の謀略だと批判する。ちょうど日本共産党が分裂する時期で、二木にとっては幸いなことに、『真相』は社内の共産党員の分裂で、まもなく休刊になる。

朝鮮戦争が始まると、『政界ジープ』52 年 4 月号に、とんでもない記事が出ます。第 3 次世界大戦では、原爆による都市攻撃のほか、農村や山岳地帯では細菌戦が重要になるという主張です。山本容というペンネームですが、二木秀雄ないし 731 部隊関係者でなければ書けない「地球の上に蚤が降る」という論文が掲載されます。

朝鮮半島や中国の奥地は山が多く人口も分散している、そういう所では、原爆はあまり効果がない。ゲリラ戦の方が有効である。ゲリラ戦には、原爆のような大量破壊兵器はあまり役に立たない、ペストノミを撒く方がはるかに有効である、という主張です。だから現代戦、第 3 次世界大戦以後の戦争は、原爆と生物兵器・化学兵器の組み合わせになると主張した論文です。これは、まさに ABC 兵器で、最近のシリアや北朝鮮の話にピッタリつながります。実際、朝鮮戦争でも細菌が使われた可能性が高いわけです。そういうことを、

二木が開き直って、『政界ジープ』で生物兵器の必要性を公然と説くようになりました。これが、731 部隊の、最後の時局雑誌上での復権になります。

恐るべき細菌戦

地球の上に蚤が降る

—細菌戦物語—

山本容

二木秀雄の「精魂社」、隊友会「精魂会」、慰霊塔「精魂塔」

1950 年の日本ブラッドバンク創設に加わった二木秀雄は、1953 年に『政界ジープ』の発行元を「精魂社」という別会社にします。その延長上で、1955 年に「精魂会」と多磨霊園「精魂塔」が作られる。この精魂会の慰霊塔は 151 万円かかったとのことですが、二木の私費による寄付が 146 万円です。ほとんど二木のカネで建てられる。彼は、翌 56 年 3 月に 7000 万近い恐喝事件で捕まりますから、たぶん 150 万円はその一部で、はした金でしょう。しかし、他の 731 部隊員にとっては重要な意味を持つ 731 部隊の慰霊塔を、二木は私費で作ったという事になる。

お配りした資料の中に、1956 年 11 月の精魂会の呼びかけ文があります。その中に、この碑を作るには 151 万円かかりましたけれども、二木秀雄氏が 146 万円寄付して完済したと出てきます。但し、呼びかけ人・世話人の中には二木秀雄の名前は無く、精魂会事務局は鈴木重夫が統括することになります。55 年 8 月に精魂塔を作って第 1 回の会合を持ち、第 2 回の会合を 1956 年夏に開く半年前に、彼は戦後最大の恐喝事件で逮捕されて、新聞にも大きく載りました。さすがに二木の汚い金で 731 部隊の戦友会と慰霊塔を作ったということではまずいので、世話人会は一応会計報告をし、二木は「精魂会」と「精魂塔」の名前の命名人として名前を残すだけで、戦友会では彼は中心になれないようにするのです。

精魂会の会員数は、56 年名簿に 187 人、66 年 234 人、73 年 243 人となりますが、圧倒的に軍医と技師と下士官で、1200 人の一般兵士はほとんど入っていません。慰霊塔には何も書いてありませんが、56 年よびかけ文では、隊員の中からも物故者・犠牲者が出てきたから、我々で仲間を慰霊する会を作ろうと言っています。慰霊の対象には、マルタ、中国人もロシア人もモンゴル人も入っていません。自分たちだけの慰霊塔だから、731 部隊の「ミニ靖国」なんです。

それに対して、少年兵たち、戦時中 14，5 歳で 731 部隊に入り、1958 年に 20 代末から 30 代初めですが、数十人で「房友会」という少年兵だけの隊友会を作ります。最後の 90 年頃には物故者を含めて 300 人の名簿になります。但し、300 人のうちの 240 人ぐらいは精魂会と重なっていますから、実はせいぜい数十人です。この人たちの手記や証言を見ると、少年兵たちは、「多磨霊園のこの慰霊碑は、我々の行った満州でのすべての犠牲者にあてられるものである」「マルタの慰霊である」と解釈するのです。つまり、碑には何も書いていないが、幹部たちは「自分たちの仲間の慰霊」と割り切り、少年兵たちは「自分たちが殺した中国人やロシア人の魂も慰めるべきだ」と解釈している。多磨霊園の精魂塔は、そういう形で残されている。これは、二木秀雄も想定しなかったことだろうと、私は読み解きました。

まだまだ残る、731 部隊研究の課題

最後に今日の話をまとめます。以上述べたことは、せいぜい 240 人ぐらいの幹部たちと、数十人の少年兵と、森村誠一『悪魔の飽食』が出てから告発を始めた人たち（医師はほんの数人しかいません）の記録にもとづくものです。隊員 3560 人という厚生省のいった数が正しいとすれば、「精魂会」や「房友会」に集った元隊員は、けっきょく全体の 1 割、300 人ぐらいだったのです。

だから残りの 3 千数百人は、ほとんど亡くなっていると思いますが、45 年 8 月に石井四郎が言った「絶対に 731 部隊にいたことは、表に出すな。秘密は墓場まで持って行け」という命令を、生涯守り続けて亡くなったようです。しかし、3560 人の名簿を一人一人追いかけて行けば、特に有名でない人でも、ご遺族の所に「こんなものがあった」という資料や記録が出てくるかもしれない。

もうひとつは、1953 年に恩給法が出来て、55 年に精魂会・精魂塔ができる。他の部隊の戦友会が出来るのとほとんど同じ時期です。靖国に参拝する一般の戦友会の場合は、ようやく軍人恩給が出るようになった、俺たちは酒場で軍歌を歌ってなつかしむだけではなく、堂々と戦友会に入って国のために尽くした報酬をもらえるようになった、と思ったことでしょう。しかし 731 部隊は、それが出来なくて、多磨霊園にこっそり集まったわけです。

ところが、1982 年にわかったことは、どうやら厚生省はこっそりと（軍人恩給は本人が申請しないと出てこないのですが）少なくとも 200 人ぐらいの幹部たち、それから数十人の名簿で明らかになっている人たちには、どうも恩給を支給していたようだ。82 年国会で

野党の質問に厚生省が答えたところによれば、石井四郎の場合は軍医の最高位である中将で月給 500 円でしたから、どうやら 2000 万円も恩給をもらったようだ。一般兵士は月給も 10 円以下でしたから、恩給もたいしたことはない。これは戦後の生活の中に、戦前の身分制度をそのまま残し差別したものだったのではないか。つまり、恩給が 3500 人のうちどのくらいの元隊員に、いつからどれだけ払われてきたのかを詳しく調べることによって、731 部隊の『悪魔の飽食』の爪痕が、戦後にどのように残されたのかが、わかってくると思います。このような意味で、731 部隊については、まだまだ研究することがあると思います。（講演終わり）

（質疑応答）

（質問１）1975 年に新宿ロイヤル病院が出来上がって、歌舞伎町に作られたという話ですよね、現在京王線の下高井戸あたりだと思いますけれども、甲州街道沿いにロイヤル病院という内科中心の病院があるのですが、それとは関係ないですか。

（加藤）　院長が川西弘さんという人であれば、歌舞伎町の時のいわば彼の右腕で、731 ともイスラム教とも関係ないが、割と腕のいい金沢医科大学出身の先生で、その後継病院という可能性があります。講演後に調べてくれた人がいて、今でも歌舞伎町にロイヤルクリニックがあり、その院長は川西さんなそうです。

この問題については、1979 年から 80 年、ちょうど森村誠一『悪魔の飽食』が本になる直前に、『週刊文春』『週刊新潮』などに、ロイヤルクリニックという怪しい病院が医師法違反で保険医を取り消されたという記事が載っています。

（質問 2）イスラム教に改宗して、どういう利権を獲得したのか。

（加藤）　二木秀雄が総裁の「日本イスラム教団」の教えというのは、はっきりしています。第 1 に「アラーの他に神はなし」、第 2 に「ムハンマドは預言者である」、この 2 つのフレーズさえ覚えて唱えれば、誰でも信者になれる、という教えです。日本には、それまでも伝統ある「日本ムスリム協会」があり、代々木に本格的なモスク（教会）があるのですが、それはイスラム教のコーランの教義、イスラム法の難しい解釈を覚えなければ信徒になれない。二木秀雄が始めた日本イスラム教団は、「大乗イスラム」といって、この 2 つのフレーズを唱えれば、その教義の内容は日本国 2600 年の歴史の中で培ってきた大和魂とほとんど変わりはない、日本人はみな潜在的にムスリムである、というのが彼の解釈です。要するに、誰でもイスラム教徒になれるというのです。

実際に信徒になった人たちの告白文が、教団から本になっているのですが、あまり教義に対する感動とか宗教的悟りの話はなく、自分は先生の教えでこの二言を唱えて祈ったら、腰の痛みが治ったとか、リューマチがよくなったとか言うのです。要するに新興宗教の現

世利益です。ポイントは、1975 年という教団設立時期で、オイルショックの真最中です。石油が入らず政府・財界も困っている時期に、サウジアラビアや中東産油国にコネをつける一番いい方法は、イスラム教徒になることだと、二木は計算したようです。

もうひとつ、裏があります。石油ショックの後は、日本で高度経済成長が終わって減量経営等で安定成長に移る時期です。ちょうどこの時期、東京新宿の副都心開発が進むのです。歌舞伎町の逆側ですが、膨大な土地を、彼と平和相互銀行の小宮山英蔵頭取が一緒になって、オイルマネー（アラブの石油のお金）で買い占める計画がありました。そのために小宮山英蔵の弟、元郵政大臣の小宮山重四郎を信徒にすることまでして、アラブの石油利権とオイルマネーに食い込もうとした。最終的には失敗するのですが、当時の自民党機関誌『月刊　自由民主』80 年 7 月号に「脈打つイスラーム新潮流」という論文を二木が書いて、「これからはイスラムの時代だ、パレスチナを承認して石油を確保せよ」と言っている調子のいい男です。

上智大学の真面目な宗教史の研究者・小村明子さんは、「日本ではイスラム教がこういう形で初めて根付いた、非常に重要な出来事である」として博士論文を書き、それが立派な本になっていますが（『日本とイスラームが出会うとき』現代書館、2015 年）、私の本では、そもそも二木秀雄に信仰心があったかどうかを問題にし、石油利権に食い込むための新興宗教の一つとして扱いました。

（質問 3）おととし、平房に行きましたら全体の規模の大きさには、愕然としましたけれども、罪証陳列館が、ちょうど新装の工事中だったんです。それで出来上がったことを知った去年、1 人の個人旅行で行って、非常にショックを受けました。アウシュビッツにも行けましたが、アウシュビッツの場合は、逃亡者も出ましたし、解放された後、解放された人もいたので、証言者がいるわけですね。でも 731 の場合は、生き証人が 1 人もいないわけですよね。

（加藤）それは正確ではなくて、確かに「マルタ」は皆殺しにされたといいますが、その親族・友人や目撃者、それに細菌戦の被害者は中国にいっぱいいます。中国の文革が終わり改革開放の時期から中国人の被害者・証言者がいっぱい現れた。それで、こちらの NPO が熱心にとりくんだ国家賠償請求裁判が可能になったのです。

（質問 5）でも、実際にメスを執ったお偉いさんたちは、アメリカと取引して、戦犯を免責されて、東大や慶大から博士号を取ったりして悠々と暮らしているわけですよ。それで下っ端者たちが良心の呵責に苦しめられながらも、つらい思いをしているわけです。でもドイツの場合は徹底的に追及していますよね。日本は何で追及しないのですか。

（加藤）私は、日本とドイツは、基本的に同じだと思っています。ドイツの場合も最も重要な軍事研究をした人たちは、免責されてアメリカに連れて行かれます。いちばん有名なのはヴェルナー・フォン・ブラウン博士のケースで、ヒットラーの下で V2 ロケットを作っていた人が、アメリカに渡って、ミサイルを作り、宇宙ロケットを作って、今やアメリカで「宇宙旅行の父」といわれているわけです。これは、この 20 年ほどで明らかになってき

たことで、ドイツで原爆を開発していた重要な物理学者を、アメリカの情報機関は戦時中から「アルソス作戦」で追いかけ、ソ連の手に渡らないようにしました。戦後はもっと大規模に、「ペーパークリップ作戦」と言いまして、すぐれた科学者たちを免責し、アメリカに「亡命」させました。当時のドイツはノーベル賞をいっぱい出して、最高の科学技術大国でした。アメリカにとって有益なドイツの研究者を戦犯にしないでアメリカに連れて行くという作戦が、これは、CIA が指揮して行われました。似たようなことを、ソ連もやっていました。

日本の 731 部隊免責も、このドイツに準じた事例だと思います。日本の原爆作りの物理学者たちの研究はあまりにも初歩的だったので、731 部隊ほどの問題にならなかった。それでも米軍は、ちゃんと調査報告書を作っていました。日本の原爆研究は、応用面では遅れているけれども、基礎研究の面では役に立つ。特に中間子を発表した湯川秀樹は世界的水準だから、日本からアメリカに招く留学の第 1 号にする、などと提言しています。それで湯川をプリンストン大学に招き、研究させるわけです。

（質問 6）731 の渡したデータを、さらにアメリカの方では研究を続けて、朝鮮戦争やベトナム戦争でも使われたと言われていますよね。私の言いたいことは、戦争というものは人間を悪魔に変えてしまうものだという事です。そういうことが山ほどありますよね。それを安倍首相は知っているのでしょうか。知っていて「戦争のできる国」にしようとしているのでしょうかねぇ。

（加藤）私の友人が成蹊大学で彼の政治学の先生で、彼の言によれば「目立たない学生だった」が「無知で無恥だ」と言っています。安倍は戦争を表面的に知っているでしょうが、深く勉強し、研究することはなかった。だから軍学共同にも熱心です。安倍内閣のもとで、日本の科学研究全体が「いつかきた道」に進もうとしているという危機感が、私がこの 731 部隊研究を始めた動機のひとつです。

（質問 7）　今前の方が、ドイツの軍医でナチスで生体実験をした者と 731 を比較して質問されたと思うのです。ニュルンベルグ裁判の中では、生体実験をした 26 名の医師を告発してそのうち 7 名の者が処刑された、こういう徹底した追及をドイツはしたのですね。それで今先生がおっしゃられた「構造は日本と変わらない」というのは、ちょっと間違いだと思いますね。

（加藤）　私は、そこを確かめようと思って、今年の 2 月はドイツの連邦公文書館に行ってきました。私のもともとの専門はドイツです。ドイツの生物戦・細菌戦の関係で捕まった人たちのほとんどは、アウシュビッツその他の収容所の中でユダヤ人らに対して行った人体実験の問題です。もちろん、その後「ニュルンベルグ・コード」が作られ、ドイツ医学界の全体が反省しているという意味ではおっしゃった通りです。けれどもこれは、ヒトラーの対連合国軍事戦略、科学技術予算配分と関係しています。

ヒットラーは軍事技術としての細菌戦とか原爆はあまり評価していなかった。彼が重視していたのは潜水艦とロケット、それに毒ガスでした。そのためナチスの下での生物戦・

細菌戦研究は、それほど予算が配分されず、進んでいなかった。確かにメンゲレの双子実験、空軍の低温実験等生体実験は行われ、「人道に対する罪」で裁かれますが、アメリカ側の評価はそれほど高くない。1947 年にソ連から石井四郎等の尋問要求があって、アメリカのワシントンで検討された時、「もしも日本の研究がナチスの生物戦研究より進んでいて、ソ連に対して秘匿できるならば、彼らを戦犯には問わないでデータを取って来い」というのが、フェル、ヒル調査団へのアメリカ軍の命令だった。事実その通りになった。つまり生物戦、細菌戦研究という面では、日本の方がドイツより進んでいた。新著の方では、エド・レジス『悪魔の生物学――日米英・秘密生物兵器計画の真実』の、米軍生物戦関係者にとって「連合軍の諜報機関による報告とは裏腹に、ドイツの生物戦プロジェクトはささやかなもので、実際の兵器は一つも製造していなかった。……それとは対照的に、日本は第二次世界大戦が始まるずっと前から、大規模な細菌戦プログラムに乗りだしていた」という一節を、引用しておきました（河出書房新社、2001 年）。

つまり、生物兵器に限っては、731 部隊の人体実験データは、ナチス・ドイツよりも貴重であるというのが、アメリカのキャンプ・デトリックの評価だったようです。それで調べていくと、戦後 CIA のヨーロッパでの記録の中に、ドイツ人科学者の米国「亡命」によるいろいろな免責事例が「ペーパークリップ作戦」として出て来る。日本語でもアニー・ジェイコブセン『ナチ科学者を獲得せよ！　アメリカ極秘国家プロジェクト　ペーパークリップ作戦』が出ています（太田出版、2015 年）。

ただし、その後の科学者と政府が、そのことについてちゃんと反省をしているかどうかという点では、雲泥の差があります。ドイツの場合は、ナチスへの追求が徹底しましたから、旧ナチ科学者はアメリカや南米に亡命して、その後ドイツには戻れない。日本では、GHQ のウィロビーの庇護とサムスの医学者登用・医師活用により、731 部隊の関係者を免責し復権させた。亡命ドイツ人よりはるかに飽食した生活を送った、ということです。

もうひとつ言いますと、いま日本学術会議で 3 回目の軍事研究反対が決議されていますね。1950 年に一度、日本学術会議は「戦争を目的とする科学研究には絶対従わない」という決議をあげています。ところがその後に朝鮮戦争が起こりますと、朝鮮戦争で細菌兵器が使われたのではないかと、学術会議の、平野義太郎とか福島要一とか、いわゆる民主主義科学者協会（民科）の会員たちが、「細菌戦に協力しない」という決議案を出します。これに反対したのが、当時の学術会議第 7 部です。第 7 部は医学・薬学です。7 部の幹部だったのが、戸田正三（京大教授で 731 部隊嘱託・当時金沢大学学長）と木村簾（京大教授で石井の恩師の一人、731 部隊嘱託）でした。彼らが「細菌戦が実際に朝鮮半島で行われたという証拠は見つかっていない」という理由で反対する。もう 1 人、有名な法学者の我妻栄が「細菌戦はジュネーブ議定書で戦時使用が禁止されている。わが国は憲法第 9 条があって、そもそも戦争しない事になっているから、そういう決議は必要ない」という理由で反対し、細菌戦反対決議は採択されませんでした。

今日ここに持ってきているのが、医学連の『ハバロフスク裁判公判記録』、1973 年に東

京大学医学部学生自治会名で発行されたハバロフスク裁判公判書類の復刻版です。1973 年に防衛医大が出来て、日本の医者たちは再び戦争に動員されようとしていると警告し、それに反対するために、当時の医学連の若い医学生たちは、日本の医学がどのような歩みをたどったかを学ぼうと、731 部隊の細菌戦を振り返るのです。当時医学部学生運動のなかで読まれた、心ある医師たちの記録で、もう一つの日本医学の伝統です。

（質問 8）先ほど先生が石井四郎が 731 部隊を解散しないで、その後も給料等を支払うと仰ったんですが、その財源はどこから来たんでしょうか。

（加藤）森村誠一さんは、『「悪魔の飽食」ノート』の中で、なお残された 731 部隊の謎の 5 つ目に、731 部隊は一体どこに金を残したのだろう、と言っています。当時東大以上の潤沢な研究予算をとっていたのが 731 部隊です。マルタには良いものを食べさせ健康体にしないといい実験材料にはならないというので、捕虜にもちゃんと食事を与えます。セントラルヒーティング、水洗便所、雑菌が育たない衛生環境で細菌研究をやっていたのです。施設、設備、予算が膨大で、森村誠一は、敗戦時 2000 万円、現在の 20 億円以上ではないかと言っています。その他に医療機器なども贅沢で、白金製シャーレや錫のインゴットなど貴金属もあった。船で運んだいわゆる隠匿物資、これが相当あったはずです。したがって、おそらく一年間くらいは 1300 人に給料を払える資金があったと思われます。

ただし連絡網がうまく機能した所と、機能しない所がありまして、例えば山口県は、千葉の「留守業務部」の責任者だった太田大佐が、その後萩市で病院を開業しますが、どうも 1950 年ぐらいまできちんと配られていたようです。岩手県とか宮城県では 1 年ぐらいで無くなっています。だから、300 円ぐらいもらって、これを退職金、口止め料だと思った人がいる。それに対して、長野県では何回か来たから給料という人もいる。恐らく全然もらわなかった人もいっぱいいる、という風にバラバラです。しかしそれらの財源は、隠匿物資、隠匿資金で、おそらく 2 年間ぐらいは続いたと思います。その後、占領軍からの機密費の金が、1947 年にはデータを提供する見返りで 25 万円、今のお金にして 2500 万円ほど入ります。二木秀雄は金儲けのうまい男で、こちらの方は、出版事業・広告取り等ビジネスで金を作っていく。

日本ブラッドバンクを作った時の、最大の株主は神戸銀行、2 番目は三和銀行です。ところが二木の政界ジープ恐喝事件の裁判記録を見ると、恐喝して金を奪い取った相手に神戸銀行が入っている。つまり、金蔓だったようです。そこでミドリ十字の内藤良一たちは、二木と縁を切っただろうと思われます。

M 資金というのを聞いたことがあるでしょう。戦後 GHQ が財産没収や隠匿物資摘発で作っていた金がどこかにプールされたのではないかと言う幻の闇金融で、それに引っかかる企業や個人がいる怪しげなお金です。それと同じように、731 部隊の資金、隠匿物資の行方はわかっていません。ジャーナリストの方がいれば、是非やって頂きたいと思います。

（質問 9）ソ連もブラウンが逃げた後、ペーネミュンデの研究者を連行しましたよね。それとの比較で言うと、この 731 というのは対ソ連が目的であったにもかかわらず、アメリカ

が関心を持ってその人たちを再雇用しようとしたのに対して、ソ連はなぜ、ドイツに対してペーネミュンデでやった同じような事を、731 に対してやらなかったのか。ソ連にはその当時細菌戦作戦が無かったのか、有ったのか、そこをまずお聞きしたい。これが 1 つ。

次は、日本の細菌戦研究、生体実験等々が、ドイツのそれに比べて、予算等々、ヒットラーが重視していなかったからという風に答えられたけれども、本当にそうだったのか、それほどドイツの BC 作戦はヤワだったのか。これもやっぱりきちんと見ないといけないじゃないかというのが 2 番目。

3 番目は、九大の生体実験がありましたが、あの時には、これはアメリカ人が対象になったわけですね。ところが 731 の場合には、白人の中ではロシア人が入っていたけれども別に欧米人はいなかったと。もし、その時に 731 部隊のマルタの中にアメリカ人やイギリス人がいたならば、果してこの免責はあり得たかどうか、これをお聞きしたい。

（加藤）1 番目の問題、ソ連の問題ですけれども、ソ連でこの問題を追及しているのは、歴史学者ロイ・メドベージェフの双子の兄の生物学者ジョセフ・メドベージェフです。彼らの『知られざるスターリン』などを見ると、ソ連も確かに細菌戦研究を始めています。但し 731 部隊のような水準では行われていなかったので、むしろ 731 部隊関係者を捕まえて協力させ、ソ連側もデータを採ろうとしていた。アメリカ側は、そのように見ていました。

ドイツの V2 ロケットを作っていたペーネミュンデ陸軍兵器試験場は、ソ連が到着した時には徹底的に破壊され、ブラウン博士は米軍に投降し、126 人の高級科学者・技術者と共に米国のフォートブリスに「亡命」しました。ペーパークリップ作戦の有名な事例です。ただし兵器生産工場の技術者たちは、ソ連軍の捕虜になり、たぶんソ連のロケット開発に使われたと考えられます。

原爆開発については、ドイツのノーベル賞受賞者ハイゼンベルグ等を追った英米のアルソス作戦がよく知られていますが、ソ連も、米英マンハッタン計画の中に物理学者クラウス・フックスのような諜報員まで送り込み、原子炉設計図まで手に入れます。それをもとに、ドイツ人の戦争捕虜である数百人の科学者・技術者を隔離し秘密都市に集めて開発させ、1949 年には核実験を可能にしたのです。これは、拙著『日本の社会主義―原爆反対・原発推進の論理』（岩波書店、2013 年）にも書きました。

このように、ナチス・ドイツの軍事技術と米ソの科学技術者獲得合戦は、兵器の種類、研究領域、ドイツ側の開発水準によって、それぞれ異なります。

これが 2 番目のご質問、ドイツの ABC 兵器の問題につながります。今度の本では、ペーパークリップ作戦の生物化学兵器開発、ドイツ人科学者獲得との関連で書いてあります。ドイツは、先ほども言いましたが、潜水艦とロケットが進んでいました、毒ガスも進んでいました。それから原爆も、日本よりははるかに進んでいました。ただ生物兵器については、アメリカの判定では、日本の 731 部隊の方が進んでいた、だからデータを独占せよとなるのです。

その関係で、ニュルンベルグ医師裁判も調べてみました。アニー・ジェイコブセンによ

ると、ナチス・ドイツの全国保健指導者代理でペスト菌を中心的に研究していたクルト・ブローメが、いったんペーパークリップ作戦でアメリカ側に「保護」され米軍に協力していましたが、第三帝国軍医総監でワクチン開発の最高責任者だったヴァルター・P・シュライバー少将がソ連の捕虜となった。1946 年 8 月 26 日、ニュルンベルグ裁判にソ連側検察の証人としてシュライバーが出廷し、ドイツの細菌戦準備・人体実験の実質は、ブローメのペスト菌研究だったと証言し、戦犯として告発します。そのためブローメは逮捕されて、ニュルンベルグ医師裁判の被告となり、シュライバーはソ連の刑務所に戻されます（このあたり、極東国際軍事裁判でソ連側証人にされた瀬島龍三と似ています）。

石井四郎はソ連にとって、いわば「日本のシュライバー」で、実行部隊の川島清が「731 のブローメ」に相当するのですが、ソ連が戦争捕虜として確保したのは石井ではなく、ドイツのシュライバーと 731 の川島であったことが、47 年のソ連側による石井四郎、菊池齋、太田澄の身柄引き渡し・尋問要求の背景にあったと考えられます。ただしブローメは、医師裁判で起訴されましたが無罪となり、西ドイツの米軍基地内で米国の生物戦研究に携わります。またシュライバーは、48 年にソ連から東独に帰還し、やがて西独に移り、アメリカ、アルゼンチンと数奇な運命を辿ります。このように、日本の石井四郎ら 731 部隊医師から詳しいデータをとれば、ソ連がシュライバーや川島清から得た可能性のある情報以上のものを、アメリカは独占できる状況にあったのです。

ではなぜ、こういうニュルンベルグ裁判ではオモテに出た問題が、極東国際軍事裁判では取り上げられないのか。1947 年頃の対日理事会の議事録がアメリカ国立公文書館にあるのですが、ソ連側は、確かにアメリカが本来戦犯になるべき人たちを隠しているのでないかと、731 ではなく一般的問題として出してきます。それに対してアメリカが反論するのが、抑留帰還船の遅れ、つまりソ連側は船を出して捕虜は 46 年中に全部帰すと言っていたけれども、まだ一割も帰ってきていないじゃないか。こう言う話をしています。これがハバロフスク裁判まで続くのです。

49 年ハバロフスク裁判で、ソ連側は、731 部隊石井四郎と共に、改めて昭和天皇を戦犯として裁こうとする。それに対するアメリカ側の回答は、ソ連が戦争捕虜帰還は完了し残っているのは戦犯だけだといっているのは誤りだ、ソ連には 36 万人の日本人がまだ残っているはずだと反論します。それでソ連の裁判はいい加減で信用できない、日本の戦犯裁判は極東国際軍事裁判で結審している、と言って公式に拒否する。極東国際軍事裁判、つまり東京裁判には、ドイツのニュルンベルグ裁判を引き継いだものとともに、ニュルンベルグ裁判を通して現れた米ソの駆け引きが、より強く影を落としたと思われます。

最後のご質問の、九大事件のように被害者が欧米人だったら免罪はありえたかという問題も、これに関連します。1946 年のはじめに、GⅡウィロビーが隠していた石井四郎の身柄を明かし、CIC ソープ准将らの尋問を許さざるを得なくなるのは、日本共産党提供の UP 通信スクープとして、石井四郎らが満州の奉天で中国人ばかりでなくアメリカ人捕虜も人体実験の材料にしていたという米軍英字新聞のニュースが流れたからでした。英文紙ですか

ら、ワシントンから問合せがあり、マッカーサー命令で石井四郎の身柄引き渡しが日本政府に公式に指示されたのです。フィリピンから移送された米軍人捕虜のことでしたが、石井四郎らは強く否定し、「マルタ」は満州の警察・憲兵隊の捕まえた抗日分子だけだと言うことにします。

これは、まだまだ調べる価値があるのですけれども、たぶん「マルタ」や細菌戦被害者に米国人、英国人、オランダ人などが入っている証拠・証言があれば、米軍の追及も違ったかたちになっていたでしょう。ただし連合国でもソ連政府は、ハバロフスク裁判で、731部隊犠牲者の人種・民族を問題にすることはありませんでした。ハルビンのロシア人なら革命を逃れた白系ロシア人だろうと考えたのかもしれません。

731部隊関係の医師や兵士の回想等を見ていると、確かに「恐らくマルタの中に白人がいたら、連合軍は許さなかっただろう」というのはあります。あと、私はこれが日本医学界の本質的問題だと思うのですが、「我々は科学のために、日本の医学の発達のために満州で細菌研究をした。我々が人体実験で使った相手は、中国人、モンゴル人、ロシア人等の中の、警察・憲兵隊に逮捕された抗日分子で、彼らはいずれ死刑になるはずの人々だった。そこで彼らを、最後に人類全体の為に役立てるように、解剖したんだ」という弁明がでてきます。これが、731医学の偽らざる実態だろうと思います。こういう倫理なき科学主義が、現在の安倍内閣まで続く、科学技術の軍事利用の問題と関係していると、私は考えています。以上です。